

CAMINOS-6 (*michi* : 道)  
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai\*  
Bernardo Villasanz\*\*

ÍNDICE GENERAL

1. 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道 (その三)」

**CAMINO DE PEREGRINACIÓN AL CARIBE Y AMÉRICA CENTRAL.**

Por Aiko Arai (新井 藍子).

2. **EN EL CAMINO DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA.**

(Ensayo sobre creencias y valores cristianos) (III)

Por Bernardo Villasanz.

---

\* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

\*\* *Bernardo Villasanz*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

## 1. 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道（その三）」

### CAMINO DE PEREGRINACIÓN AL CARIBE Y AMÉRICA CENTRAL.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

(11) 第 11 日目 アルバ島 (Aruba)、カリブ海 2月9日 (土)

早朝、8時前にアルバのオラニエスタッド港に到着した。すでに、大型クルーズ船が3隻とたくさんの小型の船が停泊していた。カリブに浮かぶビーチリゾート・アイランドは、オランダ領であるABC諸島（アンティル）のアルバ（Aruba）、ボネール（Bonaire）とキュラソー（Curacao）である。それらを取り囲んでいるターコイズブルーのカリブ海は、どこか、この世でない魔界に身をおいているという思いに浸させてくれた。この海の前に広がる真っ白なさらさらとした砂浜に魅かれて、世界中から観光客が押し寄せてくるのである。同じカリブなのに、サンタ・マルタからここまで航海してきた海の色は、濃紺であった。オラニエスタッド港の海上は、濃紺とターコイズブルーがどこまでも混じることなく一線を画してずっと果てしなく伸びているのが、摩訶不思議であった。アルバは、特別に白いパウダーサンドとユニークなジビジビの木と呼ばれている樹木によって、有名なリゾート地である。

通称ABC諸島（アンティル諸島）が現在、オランダ領である背景には、カリブ海におけるスペイン帝国へのイギリス、フランス、オランダなどの猛攻撃がある。

アンティル諸島やベネスエラ沿岸のスペイン植民地は、金の枯渇により早くも16世紀半ばには、スペイン本国やスペイン人にとって、経済的重要性を持たない二流の植民地へと転落した。しかし、この海域がスペイン本国とアメリ

カ大陸の植民地を結ぶ貿易、軍事上のルートに位置していたため、戦略上の重要性は維持し続けた。17世紀に入ると、オランダ、フランス、イギリスの北西ヨーロッパ諸国が、スペインによるこの海域の独占的領有、支配に挑み始め、以後19世紀初めまで、この海域は、ヨーロッパ列強による植民地争奪の主要舞台となっていくのである。

これら北西ヨーロッパ諸国は、海賊たちを植民地争奪戦に利用した。彼らは、新大陸植民地から本国へ金塊を積んで帰るスペインのフロータ船団の略奪をはじめ、スペイン領のカリブ海の島々や大陸の港などを襲撃した。

17世紀にスペイン領であったABC諸島は、オランダに、小アンティル諸島およびジャマイカは、イギリスに、占領された。

このように次々と19世紀初めまで、かつてスペイン領であったカリブ海域の島々は、占領されていった。占領された島々では、17世紀から奴隷制砂糖プランテーションが始まった。これは、スペイン植民地争奪以後のこの海域の歴史にとって重大な転機となった。18世紀、19世紀には、この「奴隷制砂糖プランテーション」は、この地域のほとんどに広まった。奴隷貿易と砂糖生産は巨大な富を生み出し、かつての辺境の島々は、「カリブ海の宝石」に生まれ変わった。17世紀から19世紀のおよそ3世紀の間に、主として西アフリカからカリブ海流域に送られた奴隷の数は、約400万に達した。その数はアメリカ大陸の諸地域のなかで、もっとも多かった。

西アフリカから奴隷を連れてきた理由の一つとしては、次の点があげられるであろう。1492年にコロンブスらの一行が最初のヨーロッパ人としてこの地域に到達してから、ほぼ1世紀後には、スペイン人による征服、苛酷な労役、ヨーロッパからもたらされた疫病などにより、先住民がほぼ絶滅してしまった。残ったのは、ベネズエラ沿岸、アンティル諸島などの少数のカリブ族のみであった。

カリブ海のアランダ領アンティルは、全部で6島ある。ベネズエラ北西沖にある3島、頭文字をとって通称ABC諸島、そして、リーワード諸島の3島、通称SSS諸島である。SSS諸島には、1493年、コロンブスが第2回目の航海で到達している。ABC諸島には、1499年、スペイン人のコンキスタドール、アロンソ・デ・オヘダ(Alonso de Ojeda)、イタリア人航海者のアメリゴ・ヴェスプッチ(Americo Vespcio)が到達した。しかし、スペイン人たちは、これらの島々に強い関心を示さず、リーワード諸島にわずかな植民を行っただけであった。

17世紀、これらの島々は、オランダ西インド会社が占領することとなり、軍事拠点、交易拠点として利用された。1815年以降、オランダはABC諸島を一括してキュラソー植民地として治めた。1954年12月15日、オランダ王国憲章が改正され、オランダ本国とアンティルは、オランダ王国(Kingdom of the Netherlands)を構成する対等のパートナーであるとされた。国連はこれによって非植民地化が完全なものになったとして、非自治地域リストからアンティルを外した。

アルバ島は、1986年1月1日、アンティルから離脱して単独のオランダ自治領となった。2010年10月10日、アンティルは解体された。キュラソー島は単独の自治領となり、オランダ王国の構成国となって、オランダ本国、アルバと対等な関係を持つにいたった。残るボネール島は、オランダ本国に編入され、特別自治体の地位が与えられた。

クルーズ シップ ターミナルから南東へ右手にターコイズブルーのカリブを見ながら真っ白な砂浜を目指して歩いて行く。途中には、土産物店がずらっと並んでいる。店のほとんどの人たちがメスティソというより、黒人のように黒い肌である。アルバの住民はメスティソ85%、ヨーロッパ系白人15%と聞

いていたが ..... 歴史を考えればアフリカ系黒人が住民の大多数を占めると考えたほうがよさそうである。店の人とは、スペイン語で話す。公用語のオランダ語以外にも英語、混成語のパピアメント語がよく話されるようである。

30分以上も南国の透明ではあるが、ねっとりした重大気の中を歩いてビーチに着いた。今まで見たこともないような光景が目の前に広がっていた。海のターコイズブルーと砂浜の白、空のあざやかな紺青色のコントラストが強烈な美しさを醸しだしていた。ジビジビの木陰に座って、かがやく自然の完璧とも言える美に包まれながら、人が人に与える残酷さ、また、人が人から受ける苦痛など、人間同士の、現在も、これからも、避けられない理不尽な宿命に思いを馳せていた。

(12) 第 12 日目 キュラソー島 (Curacao)、カリブ海 2月10日 (日)

朝8時頃、船は深い群青いろのウィレムスタッドへ入港した。ベネズエラの海岸からおよそ60キロ北に位置するABC諸島のCuracao-オランダ語でキュラソー、パピアメント語でクラサオ或いは、クラカオと呼ばれる、通称C島の首都である。混成語のパピアメント語は、地元の人によると、スペイン語によく似ているそうである。3島の中では一番大きく、長い間、ウィレムスタッドは、3島の首都であった。大航海時代以降は、カリブ海地域におけるオランダの貿易拠点であった。降り立った港は、中心市街とともに1997年に世界遺産に登録されただけあって、小高い丘を抱え、緑の樹木がびっしりと生い茂っている。樹木と丘の間には、赤い屋根と白壁の家屋が、統一された美しい景観を見せている。天にまで届きそうな、吸いこまれそうに透き通った水色の空には、いくつかの白い雲がぼっかり浮かんでいるのも絵になる風景である。この美しい港が、およそ200年間、奴隷貿易の島として栄えたとは .....

キュラソー島には、先住民アラワク諸族が住んでいたが、1527年以降、スペイン人によりエスパニョーラ島へ労働奴隷として連れていかれ、ほぼ絶滅してしまった。居住していたスペイン人も、17世紀に入ると、オランダ人により追放された。その後、オランダ西インド会社が、アフリカから黒人奴隷を導入して、トウモロコシや落花生のプランテーション農業や塩の生産などを営み、この島は非常に栄えた。しかし、1854年、奴隷制度が廃止され、キュラソー島の経済は、崩壊的打撃を受けた。

現在は、キュラソー産オレンジの果皮を用いたりキュールであるキュラソー酒の産地として有名である。観光にも力を入れている。アメリカ、カナダ、ヨーロッパから大勢の人がビーチにやってくる。最近では、中国からの観光客が増えたと地元の人が口をそろえて言っていた。

キュラソー島はナチス・ドイツに迫害されたユダヤ人にも関係がある。第2次世界大戦前、オランダ亡命政府の非常勤領事によってユダヤ人が出国できるように発行されたのがキュラソー島へのビザであった。本国オランダは、ナチス・ドイツに占領されたため、植民地であるキュラソー島向けビザを変則的に発行した。当時のオランダは、他の欧米諸国に比べて、ユダヤ人への偏見が比較的少なかった。このようなユダヤ人逃亡のためのビザは「キュラソー・ビザ」と呼ばれる。「キュラソー入島」は、アメリカや上海が最終目的地であったのを承知の上で発行された「名目上の行き先地」であり、「途中経由地」であった。もちろん、この島に残ったユダヤ人も少なからずいた。

今日は日曜なので、港から近いカトリック教会に直行した。がらんとしていた。前方に黒人の男性ひとりとムラートの女性がふたりきりであった。そのひとりにいつミサが始まるかを聞くと、終わったばかりだと、スペイン語で返事してくれた感じの良い女性はジェシカ ルカス、および友人はマリエラ クワ

スと私のメモ帳に書いてくれた。彼女たちがお互いに話す言葉は、オランダ語とスペイン語が混ざり合ったパピアメント語だという。スペイン語の発音に限りなく相似している。この島では、かなりスペイン語が使われているという。カトリック 87%、それ以外がプロテスタントということからも容易に理解できる。周知のように、スペインはカトリックの国、オランダはプロテスタントの国だから。彼女たちの祖先は何百年も前に、始めはスペイン人により、その後は、スペインに戦勝したオランダによりアフリカから連れてこられた黒人だと、淡々と話す。先記したキュラソー島の歴史にとっても詳しく、熱心に説明してくれた。仕事の休みの日曜日の今日、ここサンタ・アナ教会でくつろいで、ミサの後を友人どうしで過ごしている様子がかげえた。ジェシカは、大事なサンタ・アナ教会の9日間の祈りの祈祷書、ノベナ (Nobena) を友人になったしるしとして私にプレゼントしてくれた。パピアメント語で書かれている。アルファベットの文字が少々異なっているが理解はできる。たとえば、スペイン語のキリストーCristo (クリスト) が「Kristu」、聖母マリアーVirgen María (ビルヘン マリア) が「Birgen María」などである。

ジェシカとマリエラと別れて教会を出ると、しばらくの間、熱帯の光線を浴びてコロニアル風の日陰のない路を歩きながら、苦難の道を歩んできた彼女たちの何世代か前の祖先、それほど遠くはない曾祖父母やその前ぐらいの世代について考えていた。中年ぐらいの年代の彼女たちは、明るく、あけっぴろげでそんな重い歴史を背負って生きているとは思えないように、時々声をあげて笑っていた。その明るさはどこから来るのだろうか。アフリカ系の彼女たちは実にたくましく、羨ましいほどカラッとしている。あいまいさのないこの強烈な気候をはねつけるような強さがなければ、カリブ海では生き残れないのかもしれない。

キュラソー島の首都、ウィレムスタッドの浮橋（クイーン・エマ橋）の向こうにある一群の建物を目の前にしていた。ああ、どこかで見たことがある景色だと思ったら、ゴッホの描くはね橋が運河にかかっている南仏のアールの風景であった。亡くなる2年前にアールに来たゴッホは、はね橋(中央で分かれて、両側に分かれる)に興味を持った。橋の下から向こうの景色がのぞいている「ラングロワ橋」の絵には、「ゴッホの色」、つまり、神聖な天上の色である「青」が空とその空を映す水に使われている。その青にコントラストをつける太陽の色、生命の色である「黄色」が橋のそばの土手に使われている。一生、ゴッホは自身の魂の叫びを強烈な色彩、黄色と青のコントラストで表現しつづけてきた画家である。目の前のアムステルダムを再現させたと言われる一連の建物は、黄色、緑、ピンク、レンガ色、茶色など、色とりどりで塗られており、デコレーション ケーキのようにおいしそう。建物の上に一面に広がっている空は、ゴッホが創造したアールの青い空である。ゴッホは、はね橋の下の川の流れを緑がかったターコイズブルーで的確に描いている。今、目の前にしているクイーン・エマ橋の下を流れている川の青は、ゴッホの「星月夜」や「カラスのいる麦畑」、「夜のカフェ・テラス」などの青に近い。同じ「青」といってもゴッホは、いろいろな青をつくりだしている。画家のその時々々の魂の状態によって創られた微妙に異なった青なのだと思う。先記のアールの絵は、からっと明るく、ゴッホの絵の中でも心の安定を感じさせるものだと言われている。青と黄色のコントラストは、アムステルダムからハーグにあるマウリッツハイス美術館を訪れた際に「真珠の耳飾りの少女」のターバンで発見した。ターバンの青の部分には、フェルメール（17世紀のオランダを代表する画家のひとり）が追究した光の効果によって、繊細かつ微妙に異なった青が描きだされていた。衣装の表面を覆う光の結晶は黄色、陰に覆われている部分は青である。襟元の白を除けば、青と黄色が、背景の黒の中に照らしだされて光の効果をいっそう際立たせている。



数年前に訪れたアムステルダムの運河の街は、洗練された落ち着いたトーンで、8月の透明な碧い空にじっくり合っていた。運河には、はね橋もかかっていた。ゴッホの明るい南仏アルルの田舎とは異なったオランダのシックな、都会らしい風景に私は魅せられていた。そして、運河を走る小型な船のデッキで、若ものたちがシャンパンを飲みながら大声で歌っていた歌にも引きつけられた。青春と8月と運河は、なんと、ぴったり合うのだろうか。

自然と人工物（建物など）の調和がとれたところに「美」が創りだされるのだと、つくづく思う。カリブには、カリブの。アルルには、アルルの。オランダには、オランダの。

カリブ海諸島の最後の島であるボネール島に向けて出港したのは、夕方5時頃であった。まだ、空は明るく、鳥たちが遊びながら海面すれすれに飛んでいるかとおもえば、急上昇したりと、アクロバティックな飛翔を続けているのを、いつまでも見とれていた。

(13) 第13日目 ボネール島 (Bonaire)、カリブ海 2月11日 (月)

遠方の薄暗い海面一帯に、光が幻のようにゆらゆらと映っていた。だんだん近づくにつれて、島の輪郭が黒く見え、地上は宝石をあちこちにばらまいたかのように光っていた。薄墨いろの空には、灰色の雲がいろいろな姿を浮かべていた。ボネール島のクラレンジイクの港に近づく度に、建物からのまろい光が大きくなっていき、まるで山中の蛍が放つ光りのように辺りを明るくした。そして、ついに、太陽が雲を黄金いろに染めて、顔をのぞかせた。その瞬間、すでに入港していた別の大型クルーズ船が明るく照らされた。荘厳な神殿のようであった。今や、太陽は、巨大な火の玉となって海上にすっかりその姿をさらした。まわりの空と雲が、これ以上ないほど金色に染まっていた。

早朝7時には、クラレンダイクへ入港した。およそ、1時間ほど、刻々と変化していく神秘的なはざまの情景、つまり時間を写真に収めていったことになる。時間ほど捉えどころがないものなのに、自分のものに出来た僥倖に感激した。

カリブの最後の寄港地だと思うとキュッと胸が痛む。だから、今日は、いつもより早起きしたのである。

海洋生物が豊かな島と聞いて早速、ミニの潜水艦にのりこんで海底散歩に出かける。海岸から遠い沖合に出たわけではないので、熱帯の色とりどりの魚たちに会うことはできなかった。海底には、大小無数の岩山やサンゴ礁、その間を自由自在に動き回る魚たちがいた。たまたま、色鮮やかな熱帯魚を遠くに見つけると、ああ、今、カリブの海底にいるのだなあと実感できて嬉しくなった。しかし、およそ、500年ほど前には、この美しいカリブ海底にも残酷な歴史があった。

ボネール島からそれほど遠くないベネズエラ沿岸にペルラス島がある。ペルラス—真珠—の文字どおり、真珠が育つ貝がある島である。ラス・カサスによると、16世紀以降、周辺のインディオはスペイン人によって真珠採取使役をさせられた。真珠採取ほど苛酷で辛い作業はないという。真珠採りのインディオは、海中深くまで潜らされ、日の出から日没までつづき、その間ずっと、息もせず泳ぎまわり、真珠が育つ母貝を引きはがすのである。そういうインディオを目の当たりにしてきたラス・カサスの描写には、鳥肌が立つ。冷たい水に浸っているインディオは、胸を圧迫されて吐血し、下痢を起こす。生まれつきの黒い髪の毛もアザラシの体毛のように赤く焼け、背中には硝石のような発疹ができ、彼らは、まさに人間の形をした化け物か、まったく別の生きもの

にしか見えない姿になる。泳ぎの名手だったペルラス島のインディオが地獄のような仕事で死に追いやられると、他の地方や地域から、大勢のインディオが連れてこられた。

ボネール島周辺の海は、この10年間の間にもっとも素晴らしいシュノーケリング、スキューバダイビングのスポットとしてランキングされている。嫌がるインディオたちが、むりやり潜らされた海中を世界中からダイバーたちがやってきて好んで潜っている。真珠採りのインディオのこのような残酷物語を知っているダイバーが果たしているだろうか。

首都クラレンダイクを散策した後で立ち寄ったバルでベンチェに出会った。

地元の人たちが集まるバルらしく、観光客はひとりもいなかった。彼らは、お互いに顔なじみらしく、スペイン語に似たパピアメント語で話していたがすぐに、連れと私にスペイン語で話しかけてくれた。オープンで感じのいい年輩の男性だった。警備員の仕事をしていたが、現在は退職してのんびりと過ごしている。友人たちとおしゃべりをするためにバルによく来る。隣に座っていた中年の女性を、こちらは、アナ ロサと紹介してくれた。オーラ、こんにちはと気さくに挨拶を交わした。ドミニカ共和国からボネール島に仕事を見つけるために数十年前に来たという。話しているうちに、ドミニカ共和国とボネール島の関係がよく分かってきた。こちらが問いもしないのに、ベンチェが、自分の祖先は数百年前にアフリカから連れてこられた奴隷だと、淡々と微笑みを浮かべて話すのには、驚かされた。父の名前はワンガー Wanga とメモに書いてくれた。アフリカ、ケニア出身である。母はベネズエラの現在、第2の都市であるマラカイボにいた先住民、カリブ族の出身である。16世紀初頭、ボネール島の先住民がスペイン人によりエスパニョーラ島の鉱山の労働力の奴隷として連れていかれた。

先記したように、このエスパニョーラ島こそ、現在ドミニカ、ハイチ両共和国のある島で、アナ ロサの出身地である。エスパニョーラ島は、コロンブスが第1回目の航海、1492年に到着した島である。航海日誌には、この島の風物や樹木や魚などがエスパーニャ（スペイン）のものに似ていたから、エスパニョーラ島と名づけたとある。それ以来、この島はスペインの重要な植民地となっていく。アナ ロサの祖先は、当時、ボネール島からエスパニョーラ島に連れていかれた先住民であった。アナ ロサは、数百年前の祖先の生まれ故郷に戻ってきたのである。さて、ボネール島は、先住民が連れていかれた後、無人島状態となってしまった。そのために、今度は、近くのベネズエラから多くのインディオが労働奴隷としてここに連れてこられたのである。ベンチェの母方の祖先もその中に含まれていた。彼らは、牛、馬、山羊、豚などの畜産の労働力として、それこそ牛馬のごとく働かされて苛酷な生活を強いられた。

バルの中を見渡すと、ほとんどが黒人系である。知らずにたまたま入ったバルが、地元のアフリカ系黒人奴隷の子孫たちが集まる場所だったらしい。普段、彼らはお互いに何を話しているのだろうか。すぐにこの島から去っていく観光客のスペイン人の連れと東洋人の私には、日本人だったら隠したくなるような祖先の数百年にわたる壮絶な苦悶の歴史を屈託なく話してくれた。ボネール島の現在の住民が、多数のアフリカ系黒人、少数のオランダ系白人、その他のメスティソで構成されていると聞いたが、互いに彼らが集まる場所は異なっているであろう。

ベンチェもアナ ロサもカトリックである。オランダよりもスペインの方へ親密な気持ちがあったのか、それとも、単に、彼らの祖先が、最初に接触したヨーロッパ人が、スペイン人であったということかもしれない。神とモーセの十戒は信じるが、教会へはあまり行かない。歴史を学べば、教会も人間も信ずるに値しないというベンチェの言葉には重みがあった。そして、怒りをこめて、オランダ人のインディオに対する裏切り行為を非難した。1568年から

1648年の間、スペインとオランダ間で80年戦争が起こった。その結果、ボネール島は1636年にオランダにより征服され、植民地化された。戦争の間、オランダ人はインディオに自由を約束して味方につけスペインに立ち向かわせたが、勝利後、自由を要求するインディオをことごとく虐殺した。労働奴隷を失ったボネール島のオランダは、アフリカから黒人を奴隷として導入しなければならなくなった。この島は、こうしてオランダ初の奴隷貿易の中心地となった。黒人奴隷は、トウモロコシのプランテーション農場で働かされた。その後の19世紀以降もボネール島は、塩の生産地として繁栄し、黒人奴隷が働かされていた。奴隷制度が廃止されたのは、1863年である。現在は、塩の生産も行われているが、漁業が経済の中心となっている。先記したように、ボネール島は、2010年10月10日、オランダ本土とともに本国を構成する「特別自治体」となった。

そろそろ、バルを出ようとしていると、ベンチェがぼつんと言った。この島は、100年間スペイン領の流刑地だった。スペインは南米の植民地から大勢の囚人をボネール島に送ったんだよ、海に囲まれた流刑地は、脱獄不可能だからね。それで私が思い浮かべたのが、フランス領南米のギアナの流刑地、「悪魔(デビルス)島」である。周囲を海に囲まれたこの島は、脱出不可能な島として知られていた。無実の罪で終身刑を言い渡されたフランス人、パピヨン(同名の自伝小説は、1969年出版、および映画は1973年封切られた)は、悪魔島の絶壁からココヤシの袋に身を託して海に飛びこみ脱出した。海に漂っていたパピヨンは、無事に密林が茂るフランス領ギアナの本土の一端に流れついた。

ボネール島からも脱出を試みた囚人がいたかもしれない。人は自由を手に入れるためには、パピヨンのように何でもする。カリブ海には、まだまだ、周囲を海に囲まれたイギリス領、アメリカ領、オランダ領などの無数の島々がある。上記以外にも流刑地があった可能性はおおいにある。カリブ海諸島は、知れば知るほどドラマに富んでいる。

クラレンダイクの港には、出港を待つ何隻ものアメリカ、ヨーロッパの大型クルーズ船が停泊していた。前に広がっている間隔をおいて植えられているヤシの白浜のビーチは、見渡す限りどこまでも長く伸びている。それぞれ決められている最終乗船時刻ぎりぎりまで、乗船者は浜辺を散歩したり、レストランやカフェで冷たい飲み物を手にしておもいおもいの時間を過ごしている。

遠くの水平線に眼をやりながら、先ほどの暗いバルを思いうかべた。今や、ボネール島は、シュノーケリングやスキューバダイビングに最適のスポットになっている。また、大型クルーズ船もアメリカやヨーロッパから大勢の観光客を運んでくる観光スポットにもなっている。これらの観光客によって潤っているのは、ほんの一部の者であろう。ベンチェとあのバルにいた仲間たちが、その恩恵をこうむっているとは、とても思えない。以前は、奴隷貿易港として毎日のように、黒人奴隷をアフリカから運んできた船でいっぱいだったクラレンダイクの港が、今や、アメリカやヨーロッパの港から観光客を運んでくる華麗なクルーズ船でにぎわっている港に一変している。そして、ベンチェたちは、その賑わいの外に置き去りにされている。彼らにとっては、決して過ぎ去った遠い過去ではない。現在でも父母、祖父母、その先の祖先の苦悩を背負った子孫たちなのである。

青いカリブ海に囲まれた祝祭的な賑わい、華やかさ、明るさ、幸せな空気に包まれたこの島にも、もうすぐお別れだ。カリブ海の異文化、独特な歴史、人間の残酷さ、苦悩などを網羅した闇と光が奏でる交響曲とも、もうすぐお別れだ。

きらきらと金色の波しぶきを立ててクラレンダイクの港を後にしたのは、午

後の1時過ぎであった。船は一路、大西洋に向かって速度を増していった。ニューヨークに入港するのは、15日の早朝である。今日から、まるまる3日間と半日、ただ大海原の上で過ごしていれば良いとは……何という神の恵みであろうか。太陽と海と鳥たちと、朝日、夕陽、バラ色の朝焼けと金色の夕焼けと、遠くに見える島影と青い山々にかかっている真っ白な夏の雲を神の贈り物としてまるまる享受できるとは……自然にあわせて流れる時間をまるまる自分のものに出来るとは、何という幸せであろうか。潮風に髪が乱されるのも気にならず、最上階のデッキを歩きながら、この日々をただひたすら遠い地平線に目をやり、刻々と変化する自然の美に感嘆していた。「美が人間を救うという信念」、「ある風景を黙って眺めているだけで欲望を沈黙させるに十分」と言っただれかの言葉を何度も心によみがえらせていた。

そして、突如、「夜と霧」(ヴィクトール・E・フランクル)のいくつかの印象的なエピソードが映像のように浮かんだ。被収容者たちがアウシュビッツからバイエル地方に向かう護送車の鉄格子の隙間から、いただきが、今まさに夕焼けの茜色に照り映えているザルツブルクの山並みを見上げて、顔を輝かせ、うっとりする、美しい自然に魅了される場面。また、バイエルンの森で、今まさに沈んでいく夕日の光が、そびえる木立のあいだから射しこむのを見て、作業中にだれかが、そばで苦役にあえいでいる仲間に、このすばらしい情景を見るように促す場面。あるいは、労働で死ぬほど疲れて、スープの椀を手にとり土の床にへたりこんでいると、仲間がとびこんで、疲れていようが、寒かろうが出てこい、と急きたてる。太陽が沈んでいくさまを見逃させまいという、ただそれだけのために。そして、被収容者たちは、暗く燃えあがる雲におおわれた西の空をながめ、この世のものとも思えない色合いで、たえず、さまざまに幻想的な形を変えていく雲をながめた。数分間、言葉もなく心を奪われていたが、だれかが「世界はどうしてこんなに美しいんだ!」と言った。その下には、それ

とは対照的に、収容所の殺伐とした灰色の棟が広がっていたのに ..... フランク  
ルがこのように、まざまざと目に浮かぶような絵画的に表現した自然の美しさを  
毎日、3週間眺めていた私には、彼らの恍惚とした顔が見えた。彼らは、自  
由を奪われても感動するいきいきとした魂までは、奪われなかったのである。

今を生きている人たちは、上記の被収容者のように自然の美しさにあれほど  
心を奪われるだろうか。日常のあれこれとした忙しさに埋没したり、管理社会  
の下で自由を犠牲にしたりして、だんだん魂が枯渇して無感動に陥っているの  
ではないだろうか。1日の勤労の後、家路に急ぐ足をふと、とめて、夕焼けの  
美しさに見惚れて、あんな感嘆の声をあげるだろうか。

日常性の外にある永遠性を意識し、この世界の美しさに感動するのは、私の  
場合、特に、広大な海原を前にしたときだ。海が贈ってくれるかぐわしい潮風  
ほど、私を心地よくさせるものはない。

カリブ海から広々とした北大西洋に入ったのは、13日（水）だった。クラ  
レンダイクの港を出発してからまる1日半が経っていた。時は、確実に進んで  
いたのである。船の進む速度にあわせてゆっくりとではあるが .....

カリブ海と北大西洋の間に境界線があるわけではないが、海の色が異なって  
いた。エメラルドグリーンからほとんど藍色に近い紺碧色に変化していた。

15日（金）の早暁にニューヨークに入港するまで、まる2日間、最上階のデッ  
キチェアで大西洋を眺めながら、大部分の時間を過ごした。それは、繋がれて  
いた地上の一切のものから、解き放たれた心が、視界いっぱい広がっている  
海原と天上に飛翔していくという、何ものにもまさる愉悅の時間だった。



## エピローグ

プロローグでサンチョを置き去りにして、はや、3週間が経ってしまった。その間、ほとんどサンチョやドン・キホーテ、セルバンテスを思いださなかった。しかし、本当にそうだろうか。スペインの新大陸征服、植民地時代の植民地当局や植民者を相手にして、虐げられた先住民の生命と自由を擁護するために闘ったラス・カサスを「正真正銘のキホーテ」とみなしたのは、「キホーテのごとき人間」と自称したグアテマラのノーベル賞作家ミゲル・アンヘル・アストゥリアスである。彼は、「ラス・カサスー神に仕える司教」という戯曲を書いている。すでに読者が知っているように、エッセイの本文には、ラス・カサスの「インディアスの破壊についての簡潔な報告」が度々引用されている。それらの引用なしには、このたびのエッセイは成り立たなかったであろう。この報告書は、実際に当時、ラス・カサスが見てきたことが書かれている貴重な資料となるものである。インディオの窮状と救済を訴え続けてきたラス・カサスは、「平和的植民計画」、「平和的改宗計画」の実施に向けて、インディアスの植民地を訪れたが、その度に植民地官吏や植民者と激しく対立して迫害され、食料も十分に手に入れられなかった。生涯にわたり、精力的に執筆活動を続けて独自の論策を展開してきた。例えば、「インディアス史」、「すべての人々を真の宗教へ導く唯一の方法」、「現存する悪の矯正」、「インディオの奴隷化をめぐる」、 「新世界の住民を弁ずる書」、「王権とインディオの権利について」、「インディアス文明誌」、「ペルー財宝論」(ラテン語で執筆、インディオは改宗しても、キリスト教君主であるスペイン国王に服従する義務はないと説く。1562年)、「王権論」(インディオの主権と財産所有権を論じた理論的著作。1563年)、「12の疑問に答える」(スペイン人の賠償義務に関しての疑問に答えて、スペイン国王はインカ王ティトゥ・クシへ支配権を返却すべきと説く、1564年)、その他、多数の著書がある。

82歳で帰天する最後の年、1566年にも、新ローマ教皇ピウス5世に書簡を送り、インディオを野蛮で、キリスト教を受け入れる能力に欠けると主張する人々を破門に処するよう求めた。

1566年以降のスペイン人による植民地支配の実態を知れば、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスがラス・カサスを「正真正銘のドン・キホーテ」と呼んだのも納得がいくのではなかろうか。

南米の独立の父として敬愛されてきた解放者、シモン・ボリバルは、すでに述べたように、自身の理想主義を掲げた人生を振り返って、大たわけ者のドン・キホーテと考えるに至った。そういうボリバルの生涯を書いてきた。ということは、旅の間中、セルバンテスの「ドン・キホーテ」が常に思考の根底にあったことが明らかである。

では、セルバンテス自身は、「ドン・キホーテ」の書物の中でスペイン人による新大陸征服、植民地支配について何か語っているのであろうか。ほとんど、ラス・カサスと同時代人であったセルバンテスはそのテーマに無関心であったとは考えられない。ちなみに、ラス・カサスが亡くなった年には、セルバンテスは19歳の若ものだった。晩年の58歳の1605年に「ドン・キホーテ」の前篇が出版され、10年後の68歳、1615年に後篇が出版された。

当時の多くのスペイン人と同様に、本土で困窮した生活を送っていたセルバンテスは、「新大陸」で職を得たいと考えていた。43歳になっていたセルバンテスは嘆願書を提出したが、すげなく断られた。新大陸でどんな職種であれ、官吏の職は、何らかの種類の賄賂を使わなければ手に入れられないのである。詳細は、「プロローグ」に記されているので、もう一度、読み返していただきたい。

サンチョがドン・キホーテの従士になった動機のひとつは、島の領主にして

もらえるという期待であった。ついに、その望みが叶って島の領主として赴任することになる。「ドン・キホーテ」の後篇の第42章から第53章までがサンチョ・パンサの島の統治のエピソードにあてられている。それらの章を読み解くことで新大陸について、セルバンテスが考えていることが見えてくるのではなかろうか。

ある森で鷹狩に来ていた侯爵夫人からドン・キホーテ主従は、近くにある城に夫の客人として招待された。というのも、侯爵夫妻は、そろって「ドン・キホーテ」の前篇を読んでいたもので、すでに、風変わりな主従を熟知していた。

それで、邸に泊めてふたりを相手におおいに楽しもうと考えたのである。客人が滞在中、いろいろないたづらを仕掛けて楽しんだ。その間中、前篇ですでに知っていたドン・キホーテの狂気と才知にあらためて舌を巻いたのである。侯爵は、自分たちの悪ふざけをさらにおしすすめるため、サンチョには、島であるはずの所有の村を領主として赴任させることに決めた。侯爵がいよいよ島の領主として就任する準備をするようにと、サンチョに言うと、あれほどそれを望んでいたサンチョがこう答える、「おいらが天上を旅してまわり、(前篇41章で、侯爵夫妻のいたづらにより、仕掛けの木馬でサンチョとキホーテが天上の旅をしたことになっている。天から地球を眺めたというのは、サンチョの想像である。このように、後篇では、現実に見ていないものを見たというサンチョのキホーテ化が明確である) 天の高いてっぺんから地球を見おろして、それがひどくちっちゃいことが分かってからというもの、それまで抱いていた、領主になりたいという、あんなに強かった気持がいくらかしぼんじりましたよ。..... 芥子の種ほどのところを支配するってのがそんなに偉いことでしょうかね? ..... ハシバミの実くらいの間人を半ダースほど、..... それを治めるってのが、それほど威厳に満ちた、権勢を示すことなんではないでしょうかね? .....」(後篇 42 章、牛島信明訳)

ここには、見事なサンチヨの世界観と思考の変化があらわている。それは、同時に、セルバンテスの20年以上の時が経た後の「新大陸」での昇進の虚しさを表明しているのではないだろうか。

島の領主という重大な地位を大願かなって手に入れ、いよいよその島に赴任することになったサンチヨにドン・キホーテが、真面目顔で出自に関して次のような忠告を与える、「..... サンチヨよ、おのれの卑しい家柄にも誇りをもつように。決して百姓の子であることを卑屈に思ってはならぬぞ。なぜかといえば、お前がそのことを恥に思っていないと分かれば、誰もお前に恥をかかせようとはしないからじゃ。罪深い貴族よりも、身分の低い有徳の士のほうがいかほど立派であるかを考えるのだ。..... よいか、サンチヨ、お前が徳をおのれの行動の指針となし、徳義にそむかぬ行為を誇りとするならば、王侯貴族の血をひく者たちを羨む必要がどこにあるか。血は代々受け継がれるものだが、徳は個人がみずから獲得するものであってみれば、徳はそれ自体において、血統のもちえない価値を秘めているのじゃ。」（後篇42章、牛島信明訳）

キホーテのこのような思慮分別に富んだ言葉は、セルバンテスの深い知性によるものである。すでに本文で見えてきたように、新大陸においては、まだ、誰にも到達されていない島を植民地として建設した者が、その総督に王室から指名されるのである。総督となったコンキスタドールたちに貴族の出身はほとんどいない。本土では、食べていかれぬ一獲千金を夢見て新大陸に渡った大勢のコンキスタドールたちの中でも幸運に恵まれ、策略に長けた者が総督という植民地では、最高の地位にのぼりつめるのである。スペイン人の間での内乱、抗争により、しばしば、どこの植民地でも総督が、めまぐるしく交代していった。

コロンブスもジェノヴァの毛織物職人の息子であるということで、第1回目の航海出発から2カ月が経過したころに、旗艦サンタ・マリア号では、よそ者コロンブスを闇に紛れて海に投げ、航海参加者たちだけで引き返そうとする動きがあった。そして、コロンブスがエスパニョーラ島と命名した島では、同行したカステイーリャ人の家柄の良い騎士たちから反感を持たれ、危うい状況にしばしば陥っている。しかし、この島の発見により、コロンブスは、イサベル女王とフェルナンド国王から貴族に叙せられ、インディアス地方の副王兼総督となった。大西洋を管轄するスペイン艦隊の世襲職の提督にもなり、西回り航海はコロンブスだけに認められた。破格の出世である。職人の息子が貴族に叙せられたのである。いったい、どんな人柄だったのだろうか。書物を読むかぎりでは、性格が悪かった。優越意識があり、尊大で狡猾で打算的で、自分の卑しい心の内を公にすることもはばからない。キホーテがサンチョに論じたような有徳の士とは、真逆であった。そのせいか、コロンブスに対する不満と非難が続出したこの島では、コロンブスの統制から外れて生活する者がでてきた。このようにして、コロンブスの強権的な島の管理体制は少しずつ揺らぎはじめていく。

コロンブスに続く新大陸のコンキスタドールおよび植民地建設者たちも同様であった。ラス・カサスが述べているように、「..... 残虐さにかけては優劣つけがたい数名の隊長が ..... 自分の方が他の誰よりもはるかに目に余る非道な仕打ちや悪行を働いているのを自慢していたそうである。」(インディアスの破壊についての簡潔な報告)

さて、ドン・キホーテのサンチョへの忠告は、次のように、えんえんと続く；読み書きができぬというのは、大変な恥部となるゆえ、自分の名を署名するぐらいのことは覚えてほしい、お前が島をひっくり返すような騒動を引き起こすのではないか、ずんぐりしたお前の体はくだらぬ諺と悪知恵のつまった大袋に

すぎぬということを、公爵にばらしてしまえば、すぐにも解消できる、云々……

それに対するサンチョの答えは、あっぱれとしか言いようがない、「……サンチョって男は島の統治にゃ向いてねえと思いなさるなら、おいらこの場で島を手放すことにしてもいいよ。……この体全体より、ほんの爪の垢みたいな魂でもこっちのほうが大切だからね。……おいらはパンと玉葱だけで身を養っていくつもりでさあ。……領主になって地獄に落ちるより、ただのサンチョで天国へ行ったほうがましですよ。」(後篇 43 章、牛島信明訳)

サンチョが述べた言葉は、上記のコンキスタドールとは全く反対の無欲、崇高な魂、まことのキリスト教徒、つまり、身にあまる贅沢、欲望のためには、魂を悪魔に売り渡さないというきっぱりした意思表示なのである。それは、セルバンテスの意志そのものである。

サンチョにすっかり感心したキホーテも「……お前は千の島の領主になる資格があるというものよ。お前には生得のよい資質があるが、実際それなくしては、学問など何の役にも立たんのじゃ。……」(後篇 43 章、牛島信明訳)

そして、「ドン・キホーテ」の全編を貫いているセルバンテスの思想が次のキホーテの言葉で明確になる、「すべてを神にゆだねて、めでたく初一念を貫くがよい。……お前に起こるあらゆる問題を過つことなく見事に解決するという、固い意志と信念をつねに保持せよということじゃ。……天はいつでも善意を庇護したまうからじゃ。」(後篇 43 章、牛島信明訳)

善意と高潔な人、セルバンテスが自身に言い聞かせている言葉であると、私には、とれる。

サンチョは大勢のお供を従えて、人口千人ほどの、公爵の所領のなかでは最もすばらしい村のひとつに到着した。サンチョにはそれがバラタリアと呼ぶ島であると告げられていた。高い城壁でかこまれた村の入り口に着いた。村の大

聖堂で奇妙きてれつな儀式が執り行われた。村の鍵が彼に渡され、サンチョはバラタリアの終身領主として認められた。

ここから、セルバンテスの本国スペイン、もしくは、植民地で、はびこっている肩書に対するイロニーがサンチョの口から出てくる。ドン・サンチョ・パンサと呼ばれたサンチョは、「ドン」なんていう偉い肩書は持っていないし、父親も祖父も、みんなただのパンサだった。この島では、石ころより「ドン」がごろごろしてると見える。自分の統治中、蚊みたいにうるさい、うじゃうじゃしてる「ドン」を一掃するつもりだ、と宣言までした。「ドン」は、「殿、様、師、卿」などの意味で、元来は貴族に対する敬称であった。現在のスペイン社会では、あまり使われていない。中南米では、一般的に用いられない。スペイン人支配による当時の植民地では、本国スペインから来た貴族や、植民地で手柄により貴族に叙せられた者が、平民やインディオと区別するために好んで「ドン」という肩書を用いた可能性がある。それをセルバンテスが揶揄したと考えられる。サンチョが百姓出身だと知っている公爵の配下のものたちが、わざわざ「ドン」と呼んでサンチョを有頂天にさせようとしたが、利発なサンチョは、その手にのるどころか、お金で買うことができる肩書に軽蔑の念を示したのである。堂々とサンチョは誇らしげに執事にこう告げる、「わしの名はただのサンチョ・パンサで、父親もサンチョなら祖父様もサンチョで、そいで、みんな「ドン」みたいな添えものなしのパンサだったんだ。」(後篇 45 章、牛島信明訳)

サンチョをからかうために用意されたもののひとつに、「お裁き」がある。偽の法廷でサンチョがどのような裁きをするかをおおいに笑い、楽しむためである。結果として、学問はないが、記憶力がよい才知に長けたサンチョの判決に一同は、笑い、驚嘆し、賢王ソロモンの生まれかわりかと思ったほどである。

そして、悪ふざけの発案者であった公爵夫妻は、おおいに喜び、楽しまれた

のである。(ああ、このように、貴族は平民を愚弄し、慰みものにするのである)

サンチョが出発してしまって、ひとり公爵夫妻の邸に残されたキホーテは、どうしようもない孤独感に襲われた。しかし、そのキホーテに対しても数々の愚弄が夫妻によって発案され、実行された。その結果、キホーテは顔じゅう傷だらけになり、5日の間、寝たきりの生活を送った。夫妻も自分たちの悪ふざけが度をこしてしまったことを知り、後悔した。どこまでも善良なキホーテは、騒動のさいちゅうに、自分を助けにきてくれた夫妻の厚意が身にしみて分かったと言い、おおいに感謝するのである。

サンチョの住まいである壮麗な宮殿で、サンチョは悪ふざけにより、さんざんな目に会う。たとえば、ごちそうの並べられた食卓で、サンチョが皿を取ろうとするたびに、健康に悪いという理由で医者の方で取り上げられてしまい、空腹で惨めなおもいをする。「前篇」で大食らいのサンチョというイメージを強く持った公爵夫妻をはじめとする宮殿の人たちによるたちの悪い愚弄、もしくは、いじめである。「後篇」は、すでに指摘したように、津々浦々まで名前が知られたキホーテとサンチョのイメージを基にして物語が語られていく。

前述のキホーテのように、公爵夫妻によってからかわれているとは、いつときも疑われない善良なサンチョは、夫妻に恩義を感じ「わしの力の及ぶ限りご奉仕するつもりでございます……」、またキホーテに対しても「わしのご主人のドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ様にも、わしが食わしていただいたパンの恩を忘れるような男じゃねえことを知ってもらうために……」(後篇47章、牛島信明訳)と、恩義を感じているまっとうな人間として描写されている。

つまり、前篇では、サンチョは、読者がすでに知っているように、「愚かで、



がさつで、太っちょである、云々」と描かれていることが多かったが、後篇では、「他人の言いなりになるような男ではなかった……」(49章)というように、サンチョは、己の意見を堂々と述べ、まわりの愚弄する人たちを見事な話しぶりや鋭敏な分別で、驚嘆させるような優れた男として描かれるようになっていく。スペイン本土であれ、植民地であれ、いつでも、どこでも賄賂を取ることが当たり前の社会で、サンチョの清廉ぶりが、同章の「わしはこの島を、権利を捨てはしねえけど賄賂なんぞ取ることなく治めてみせるさ。」で示されている。高潔な騎士、ドン・キホーテと一緒に長い間、生活を共にしてきた従士がここまで変身したのである。学問がなく、文字を全く知らない愚かなサンチョと考えていたまわりの人間が「われわれをここへ派遣なさった公爵夫妻と、派遣されてきたわれわれが、閣下の人となりから予想していたところとは、およそかけはなれたことをお話しになるなんて、夢想だにしておりませんでした。」(後篇49章、牛島信明訳)と、驚き感じ入って、つと、本音をもらしてしまったのも前篇を読んだ先入観によるものである。

第50章では、サンチョと同じ村の司祭、学士サンソン・カラスコが、サンチョが、ある島の領主になったことを聞き及び、狐につままれたような感じがしてならない、なぜなら、地中海にあるすべての島は、あるいは大半の島は国王陛下の領有されるところだからと、不思議がる。

サンチョの傍に常について、彼の言動をご主人である公爵夫妻に逐一報告する役目の執事は、サンチョの言葉と行いには鋭い才能と単純さがないまぜになっているのに、驚嘆していた。そして、先記した悪戯によって、これほど聡明な領主を飢え死にさせるのは忍びないと思うようになり、この「領主ごっこ」にけりをつけたいと考えるようになった。

一方では、キホーテは現在の無為の生活を早々に切り上げたい、なぜなら、このような生活のために生まれてきたのではない、公爵夫妻の気持ちに従うより、

おのが本分をまっとうするのが義務であると、サンチョへの手紙で述べている。また、16世紀末に、セビーリヤで小麦調達吏という気の重い任務に携わっていたセルバンテスは、その時の経験に基づいてサンチョへの忠告も忘れてはいない、「.....そなたが治める人民の意を得んがためには、.....食料の十分なる備蓄に努めること。なんとすれば、飢えと欠乏ほど貧しき者たちの心をさいなむものはなきが故にて候。」(後篇 51 章、牛島信明訳)

キホーテへの返信のサンチョの手紙の中では、当時の領地を支配する者の慣習が赤裸々に述べられている、「.....わしは税金に手をつけちゃいねえし、賄賂ももらっちゃいねえから、それがどのようなものか想像もつきません。当地にて人から聞いたところによれば、この島にやってくる歴代の領主たちは、ここへ乗りこむ前に、この土地の住民から多くの金を献上されたり、貸してもらったりするのが常であり、そうしたことは、この島に限らず、どこでも領地を支配する者にはつきものだとのこと。」(後篇 51 章、牛島信明訳)

悪徳の領主とは違い、サンチョは島と思いこんでいたその領地のよき統治のために、実に立派な法を定めたので、それらは今日にいたるも「偉大なる領主サンチョ・パンサの憲法」として称えられ、守られているのである。

新大陸の植民地を治める総督にもこのような慣習があったことが、容易に推察される文である。新大陸でひと旗あげようと考え、請願書で財務官、または経理官、あるいは監察官の役職を願いでて、あっさり断られたセルバンテスが、後になって、そのあたりの事情を聞きおよんだものと、思われる。

夫のサンチョ・パンサに宛てたテレサ・パンサの手紙の中で、セルバンテスが当時のコンキスタドールを揶揄しているとおもわれる個所がある、「しがない山羊飼いが島の領主になるなんて、誰が想像できるものですかね。」(後篇 52 章、牛島信明訳) メキシコを征服したエルナン・コルテスにしろ、インカ帝国を滅亡させたフランシスコ・ピサロにしろ、多くのコンキスタドールたち、つまり、後の植民地統治を任された者たちは、スペインでサンチョのような生

活をしていた者たちが多い。ひと旗あげようと、野心満々なおもいで新大陸に渡っていったのである。その新大陸では、そのような野心にみちた征服者同士の対立がしばしば起こり、暗殺されたり、処刑されたりしている。最高の地位を得たとしても、常に生命の危険にさらされていたのである。

サンチョに対する悪ふざけの推進者たちが、サンチョを領主職から追い出すために策略を練り、騒動を引き起こす。さんざん痛い目にあったサンチョは、ここを出るために、愛する驢馬を抱きしめ、涙さえ浮かべてこう話しかけた、「……おいらの大好きな仲間、おいらがいつもお前といっしょにいて、……おいらにとって1時間1時間が、毎日毎日が、来る年来る年がとても幸せだった。ところが、おいらがお前を見捨てて、野心と傲慢の塔の上に登ってからというもの、おいらの魂のなかに数限りない悲しみと気苦労、そして、さらに数多くの不安が入りこんだのよ。」(後篇 53 章、牛島信明訳)

サンチョの心から発する言葉に誰ひとりとして彼に声をかける者はいなかった。鞍をつけ終わると、サンチョは痛む体を励まし、やっとの思いで驢馬にまたがり、さらに思慮分別に富んだ言葉を発する、「……わしは領主になったり、攻め寄せてくる敵から島や市を守ったりするために生まれてきた男じゃねえ。わしには法律をつくったり、国や地方を治めたりするよりか、鍬や犁で畑を耕したり、ぶどうの木の刈りこみや取り木をしったりすることのほうが、よっぽど性に合ってるよ。……人はそれぞれ生まれに合った仕事をするがいいってこと、わしの手には、領主の權威の杖よりか、鎌のほうがおさまりがいいってことなんだ。」(後篇 53 章、牛島信明訳)

未だに、その頃、大勢のスペイン人が故郷を、代々のなりわいを、家族を捨てて新大陸を目指していた。それらの人々に対する警告になるであろう言葉である。

極めつきの清廉なサンチョのお別れの言葉は、「……公爵様には、こう言っと

いてくれる。サンチョは裸で生まれて、今も裸、損もしなけりゃ得もしねえってね。わしは一文なしでこの島を治めにきて、一文なしでこの島を出ていく、つまり、よその島の普通の領主たちがどっさり貯めこんで出ていくのとは大違いだっけね。」(後篇 53 章、牛島信明訳)

セルバンテスによる領主への、ひいては、国、地方、町や村を治めているトップや政治家、特に、当時の本国から新大陸に派遣された最高官吏への痛烈な批判であろう。「ドン・キホーテ」全篇をとおして、これほど心に響くサンチョのせりふはない。自身を天使みたいに清潔な政治をしたと、誇らしげに言うサンチョにまわりの者たちが、旅にほしいもの、必要なものは何なりとさしあげましよう、好意を示したが、驢馬のために大麦を少々と、自身のためにパンとチーズの塊をそれぞれ半分ほどもらえればいい、と答える。前篇でいつもお腹を空かし、がつつ食べていたサンチョの変わりようには、驚かされるばかりである。その場にいた者はかわるがわる彼を抱擁し、サンチョもまた、彼の思慮にとんだ言葉や賢明な決断に感心している人びとのもとを去ったのである。

自分の村に帰る道中、サンチョは顔見知りのモリスコ（キリスト教徒に改宗してスペインに残留したモーロ人）、リコーテに出会った。前述したように、レコンキスタが終わると、スペイン国王陛下により彼らは、国外退去を命じられた。リコーテは住む場所を探すためにひとり村を出た。しかし、スペインこそ生まれ故郷なので、スペイン恋しさに泣いていたと、しみじみと、サンチョに今までの経緯を語る。リコーテはスペインを出てから、フランス、イタリア、ドイツに渡った。そこで知り合った巡礼たちと仲間になった。彼らは毎年スペインにやってきて、あちこちの聖地を巡るのを習慣にしている、「スペインを彼らのインディアスと、すなわち、おあつらえむきの、しかも確実な稼ぎ場所と心得ているのさ。」(後篇 54 章、牛島信明訳) リコーテによると、彼ら

はスペイン中を歩き回って、飲み食いのもてなしを受け、お金ももらい、旅の終わりになると、相当なお金がたまる。それを金（きん）に換えて、どこかに巧妙に隠して自分の国に持ち帰る。

気づかれたように、ここで初めてセルバンテスは、インディアス（新大陸）の名前をあげている。今までは、単に島とか村とかの領地の領主にサンチョがなったと言及していた。当時のスペイン人は、インディアスに渡って先住民を搾取し、奴隷として働かせ、稼ぎ場所に使っていた。そして、上記の巡礼たちと同じように、お金が貯まると、黄金に換えて本国に持ち帰っていた。セルバンテスは次のサンチョの言葉でそういう金の稼ぎ方を批判している。

協力してくれれば、楽に暮らしていけるだけのものを上げると、リコーテに誘われたサンチョは、「正直に稼いだ金でさえすぐに失くなる、ましてや悪銭など身につかぬえどころか、その持主まで身を滅ぼすことになるってことが分かっているんだから。」（同上）と、常に、自分を欲深なところのない男と宣言しているとおり、ここでもきっぱり断る。

ひょんなことから、道中、ドン・キホーテとサンチョが再会し、近くの公爵夫妻の邸に戻る羽目になった。サンチョが彼らに挨拶して、領主職を堂々とう批判する、「領主、つまり統治者なんてものなあ愚にもつかねえ職務だ、そいつは島の領主であろうと全世界の領主であろうと同じだってことを悟るようになりましたね。」（後篇 55 章、牛島信明訳）さらに、サンチョはドン・キホーテに仕えてさえいれば、おっかなびっくりでパンを食べなきゃならねえにしても、とにかく腹いっぱい食べられる、腹がいっぱいでありさえすりゃ、中に入ったものが人参であろうとシャコであろうと同じですからね、と高い悟りの境地へ達したと思わせる言葉を述べる。セルバンテスの深い思考が、万人に理解できる易しい言葉で綴られている章である。この章だけではない。「ドン・キホーテ」という書物で、セルバンテスは、あらゆる階級の者たちへ、あるい

は、学問があらうとなかろうと、スペイン人であらうとなかろうと、大声で笑える面白いエピソードとたくさんの登場人物の対話をとおして、あるときは、品格のある美しい言葉で、あるときは、平易な言葉で、時代を越えた普遍的な真実を繰り返かえし、繰り返かえし、述べているのである。

さて、ここらへんで愛すべきドン・キホーテとサンチョ・パンサにお別れする 때가 やってきた。後篇は、まだまだ第74章まで続く。彼らとお別れするのは、忍び難いという読者には、これからも続くまことに面白い武勇伝や、彼らにふりかかった珍しい冒険、災難など、読みごたえのあるエピソードがたくさん待っている。

「新大陸」という視点で、セルバンテスが、スペイン人による征服、植民地化についてどのように考えていたかを、キホーテおよびサンチョの言葉をとおして考察してきた。それ故、その箇所引用文が長くなってしまった。セルバンテスの思想を十分に理解していただくためには、引用文だけではなく、少なくとも引用されている章、理想的には、「ドン・キホーテ」という不朽の文学作品を読みとばすのではなく、じっくりと一つひとつの言葉を味わって読んでもらいたいと思う。セルバンテの考えを的確に汲みとるためには、それしか方法がないと、考えている。

## 参考文献

- インディアスの破壊についての簡潔な報告。ラス・カサス。染田秀藤訳。岩波書店。東京。2017年。
- インカの反乱。被征服者の声。ティトウ・クシ・ユパンギ述。染田秀藤訳。岩波書店。東京。1997年。
- 黄金郷(エルドラド)伝説。山田篤美。中公新書。東京。2008年。
- コロンブス、全航海の報告。林屋永吉。岩波文庫。東京。2011年。
- コロンブス、大航海時代の起業家。青木康征。中公新書。東京。1989年。
- マヤ文明、密林に栄えた石器文化。青山和夫。岩波新書。東京。2012年。
- 物語、スペインの歴史、海洋帝国の黄金時代。岩根隼和。中公新書。東京。2002年。
- ドン・キホーテ。セルバンテス。牛島信明訳。岩波文庫。東京。2007年。
- 百年の孤独。G・ガルシア・マルケス。鼓直訳。新潮社。東京。2019年。
- ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987年。
- グレートジャーニー、人類5万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010年。
- 夜と霧。ヴィクトール・E・フランクル。池田香代子訳。みすず書房。東京。2002年。
- 誰も知らない「名画の見方」。高階秀樹。小学館。東京。2010年。
- 地球の歩き方、中米。2018 - 19。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017年。
- Brevísima relación de la destrucción de las Indias. Bartolomé de las Casas. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cartas de la conquista de México. Hernán Cortés. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cristóbal Colón. Su vida y descubrimiento a la luz de sus profecías. Kay Brigham. TERRASSA. Barcelona, España. 1990.
- De Cristóbal Colón a Fidel Castro (I). Juan Bosch. SARPE. Madrid, España. 1985.
- De Cristóbal Colón a Fidel Castro (II). Juan Bosch. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cien años de soledad. Gabriel García Márquez. Editorial Sudamericana SA.



Barco utilizado en el viaje al Caribe.  
クルーズ船



La autora con la estatua de  
Sancho Panza.  
サンチョの像と筆者



Nativo del Caribe.



Nativas de Curacao (Willemstad)

カリブ海諸島の地元の人々。



**2. EN EL CAMINO DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA.**

(Ensayo sobre creencias y valores cristianos) (III)

Por Bernardo Villasanz.

*“La muerte es vuestra vida futura.**En verdad os digo que Yo soy la Vida”**(-La PALABRA continúa en el signo de los tiempos-)***RESUMEN**

*En esta tercera parte (“escatología y soteriología de la identidad cristiana”) nos adentramos en un aspecto esencial de la identidad cristiana: la vida eterna. Se trata de esa unión con Dios que no es sino la vocación, el destino y en definitiva el fin último del ser humano.*

*Esta unión es la interacción entre la iglesia peregrina con la celeste. La muerte, el juicio, el infierno, el cielo y el purgatorio (los Novísimos) son temas sugestivos para una verdadera conversión. Es algo personal en cuanto que al fin nos presentaremos ante Dios con nuestro curriculum de actos, palabras y pensamientos.*

*Se concluye con un epílogo sobre la tesis preliminar que el autor ha intentado argumentar en todo lo expuesto y que podríamos sintetizar así: la verdadera fe cristiana es la creencia en que todo ser humano desea encontrar su auténtica identidad, una identidad que va construyendo aquí como prólogo y contenido del libro de su vida y que desarrollará más plenamente en la otra, en el Reino de Dios.*

***Construimos nuestro libro celestial con el dolor y el sufrimiento, los gozos y alegrías de nuestra conversión actual.***

## PRÓLOGO

En el misterio de la construcción de la identidad cristiana la comunicación textual de la Palabra revelada proporciona un injerto en el lector siendo para cada persona algo individual y único según sus características y su idiosincrasia.

Si, como pretendemos, deseamos una verdadera comunicación con el mensaje de la Palabra revelada esto debería provocar en nosotros la misma reacción que provoca en el autor sagrado. Partimos del conflicto entre el “yo” del lector frente a la actitud del otro en la narración textual; lo característico de la identidad personal como identidad social con todo el bagaje de sus actitudes y creencias es su contingencia, es decir, la posibilidad de que suceda o no dicha interacción simbólica.

Una verdadera interacción simbólica entre el emisor y el receptor consideraría el mensaje como expresión de una verdad profunda y un principio de aplicación universal, Nuestro “yo” interiorizaría en su sistema de la personalidad y en su conducta la identidad narrativa que se desprende del texto.

Lograr esto supondría en un primer intento reconstruir la dinámica interna de los textos siendo fieles a lo que leemos objetivamente (*sentido inmanente de la estructura del texto*) y en un segundo intento hacemos un esfuerzo subjetivo para restituir la capacidad del texto al proyectarse hacia el exterior (*acto complementario de su referencia extralingüística*) aplicando

tal referencia a nuestro mundo real.

Nuestro ideal es que en nuestra posición metodológica nos apropiemos del texto de la Palabra revelada de tal manera que en dicho acto hagamos realidad nuestra lo que la escritura expresa objetivamente. Un mensaje que puede ser considerado independiente tanto del autor como del destinatario. Nuestra identidad personal anclada en un “yo inferior” (*ego*) al leer los mensajes bíblicos con su estructura y sentido inmanente intenta lograr a través de un limitado esfuerzo subjetivo de interpretación una restitución de su significado. El resultado debería ser una transformación de la propia identidad en un “yo superior” transcendente.

Este yo superior en el que tratamos de introducirnos al interiorizar y practicar los textos de la Palabra nos lleva también a su libre obediencia porque al obedecer es cierto que nos cuesta la *propia libertad* y la vida pero como resultado derrota a nuestro yo encadenado a una *falsa libertad* en virtud de su poder.

Más importante que la muerte del cuerpo es la del alma y en todo está la soberbia que ha formado el curso de nuestras acciones. La unión de nuestro nuevo yo al sumo Bien es la mejor actitud del alma para purgarse en el camino al Paraíso.

Así el nuevo yo va perdiendo todo gusto propio y va considerando cómo todo lo del mundo le parece lejano y sin sentido, incluso cansado y aburrido. Siente la necesidad de habituarse a otra forma de pensar, a otro modo de obrar. Deja incluso de construirse su propio camino del mañana pues se deja conducir por la Palabra.

Ciertamente el Adversario desencadenará contra nosotros su ejército pero dejaremos que la oración y el abandono a la voluntad divina sea la que

verdaderamente obre. Cada cosa y acontecer cotidiano empieza a tener un preciso y profundo significado. Momentos de incompreensiones, de sufrimientos, de abandonos e incluso de caídas se van percibiendo como momentos necesarios y fecundos para lo que es la construcción de la identidad cristiana.

### **III. ESCATOLOGÍA Y SOTERIOLOGÍA EN LA IDENTIDAD CRISTIANA (DESTINO Y SALVACIÓN DEL SER HUMANO).**

Nos adentramos en un paso más en este estudio de la identidad cristiana en cuanto al destino último del ser humano según las creencias referentes a la vida de ultratumba, o sea, al ámbito más allá de la muerte así como a la doctrina de la salvación en el sentido de la religión cristiana.

Desde un punto de vista humano el hecho de la muerte es un reconocimiento objetivo de la mortalidad, una conciencia de sí mismo ante una realidad que nos enfrenta inexorablemente a un temor de la pérdida irremediable de la identidad personal y la constatación de la propia inseguridad ontológica.

Por otro lado la idea de la muerte tiene un significado que denota generalmente cierto temor a lo desconocido predominando un tipo de sensación más bien llena de pesimismo y tragedia en lugar de una visión esperanzada y gozosa de un tránsito a una feliz y más dichosa vida de resurrección.

Las actitudes ante la propia muerte pueden variar desde una indiferencia considerándola como algo normal que tiene que acontecer, una actitud de temor por lo que supone de dolor y sufrimiento, una actitud de un

esperanzado descanso si la persona ha sufrido mucho en su vida, hasta la de una actitud de serenidad al tener conciencia de que se ha vivido una vida plena habiendo sido útil a los demás.

Esto nos lleva a reflexionar ante el propio acto de morir como una experiencia personal que debemos afrontar en solitario. El carácter desconocido y el no saber con certeza que sucede después de ella genera diversos temores del que se puede señalar la posibilidad del verse sometido a un juicio particular de las propias acciones y de los talentos que se nos han confiado y de los que supuestamente tenemos que dar cuenta.

Si bien sabemos que todos los seres humanos en las diversas etapas de la vida atraviesan por una serie de crisis a las que ha debido hacer frente, al final se trata de una evaluación total en la que la persona trata de aceptar todo lo ocurrido en su vida e intenta encontrar un sentido de integridad y totalidad. En caso contrario de no aceptar el hecho de la muerte y se la rechazase habría un sentimiento como de vacío en el que el tiempo y las oportunidades se han agotado generando amargura e incluso desesperación por el tiempo perdido.

Sobre todo en la llamada adultez tardía, edad de la madurez o de la vejez la tarea primordial es lograr una integración de la identidad porque por una parte biológicamente el cuerpo se deteriora, surgen enfermedades empezando a temer cuestiones en las que no nos habíamos preocupados antes. Integrar el yo es aceptar el curso de los eventos y aceptarse en los errores y en los aciertos.

También cabe la posibilidad de existir una actitud de apatía e indiferencia ante el hecho de morir pues suele pensarse que nadie ha regresado del más allá para explicarnos en qué consiste y por lo tanto es

dudable e incierto de que exista ese otro más allá. Afirmación que no tiene en cuenta la Revelación ni el mensaje de Cristo, pues no se apoya esta indiferencia en las huellas que nos ha dejado de su resurrección.

No sólo hay una afirmación expresa sino que además existe como ya se ha mencionado un episodio en el que encontramos una visión anticipada del Reino que es el de la Transfiguración. Fue y es una manera de fortalecer los ánimos no sólo de los Apóstoles sino de todos los creyentes antes de su Pasión y muerte en la cruz. Dado que la cruz y la realidad de la muerte por sí misma escandaliza, parece como si Jesús quisiera dosificar y equilibrar los momentos de sufrimiento con los de gloria. Se nos hace difícil aceptar la realidad de la cruz sin ponernos en presencia de su luz para que nos ilumine.

Hay experiencias relevantes en el AT sobre la gloria de Dios: Moisés en el monte Sinaí ya contempló la gloria de Dios en la zarza y Elías también tuvo una experiencia similar en el susurro de una brisa suave, aunque si bien ambos parecen estar “iluminados” por una luz exterior; en cambio, en el caso de Jesucristo la luz resplandece y sale de Él mismo.

Siguiendo con la analogía de la identidad humana “injertada”, encontramos dos parábolas de Jesús muy relacionadas, por una parte está la parábola del sembrador y por otra la parábola de la cizaña del campo.

Cristo en los evangelios se revela siempre buscando la salvación de todos pero destaca esa semilla deteriorada de la voluntad humana que entorpece la siembra de la Semilla del Verbo. Depende de nuestra elección individual así será nuestro destino.<sup>(1)</sup>

La parábola del trigo y la cizaña se relaciona con el tema que abordamos sobre la muerte y resurrección en la identidad cristiana. Ofrece esta parábola

una presentación dinámica del juicio final y de la separación que se producirá entre los « obradores de iniquidad » y los « justos »<sup>(2)</sup>. Pero mientras somos viadores, el reino de Dios en la tierra está mezclado, es un cuerpo mixto formado por santos y pecadores, hasta la criba final que realizarán los ángeles de Dios. Mientras tanto se impone la tolerancia, la paciencia y el dominio de sí mismo sin juzgar al prójimo pues nadie debe usurpar el juicio divino. Equilibrio difícil de lograr pero necesario.

Esta idea de la separación por los ángeles de los buenos y los malos es expuesta también en la parábola de la red. Cuando la red se llena los pescadores la sacan a la playa y se sientan a escoger el pescado, guardando el bueno y tirando el malo. (Mateo 13:48)

En la Sagrada Escritura el “cielo” se refiere a la gloria escatológica perteneciente a la creencia en la vida eterna en el ámbito más allá de la muerte. Un lugar con la existencia de seres espirituales llamados “ángeles” que son servidores y mensajeros de Dios. Puede decirse que para las cosas celestiales los ángeles existen para quien tiene fe en ellos pues los ángeles al igual que todo lo relacionado con la Revelación está hecho de fe verdadera que es la fuerza de lo divino. Los ángeles existen solamente por Jesús como servidores una escala de vibraciones de la gracia que intentan estar en contacto con las criaturas humanas.

Los ángeles son la luz de Cristo que iluminan con su esplendor, al vivir Jesús en ellos llevan su Luz a los seres humanos que nunca agradeceremos lo suficiente la obra generalmente incomprensible de sus servicios en la tierra.

La fe cristiana en el “más allá de la muerte” cree en la inmortalidad del

alma que al separarse del cuerpo en el momento de la muerte, por medio del juicio particular recibe la retribución apropiada según sus obras. El alma puede resucitar o bien para la vida eterna (el cielo) o resucitar para la condena eterna (infierno). Jesús no llama “muerte” a la muerte terrena, la llama “vida eterna”:

*“¡En aquel tiempo era hombre también y lloré por Lázaro, pero era Dios y lo hice resucitar! Para haceros comprender que se llora por quien viene hacia Mí, y vosotros os sentís solos y lacerados en la carne, pero sabed que no os han dejado, han resucitado y viven de verdad.*

*Y entonces mis criaturas sabed que la muerte es un paso hacia la Vida para los que han vivido bien. ¡En verdad os digo: miradme, mirad mi resurrección! ¡También aquellos que amáis y lloráis han resucitado!” (La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen I. Argentina, editorial María Mensajera, 1 Edición 2002: 8 de Enero de 1974)*

Cuando débilmente empezamos el camino de la conversión el sentimiento impactante de la certeza de la muerte es un estímulo. La muerte nos causa pánico cuando volvemos la espalda a Dios pero la fe en la resurrección nos alienta aunque sea un mal inevitable y necesario. Si somos uno con Jesús no queda mucho por resucitar en nosotros. Él es la piedra angular que lleva toda la carga, el que redime y al que servimos. La muerte es en realidad un renacer.

Así pues, **renacer o nacer de nuevo** vienen a equipararse en la fe cristiana a un libre deseo de ser liberada el alma y de ser transformada. Esta transformación quiere significar que se pasa de una mera “existencia” a una



verdadera “vida” y por tanto la muerte se percibe de una manera diferente. Tiene un sentido positivo aunque sea un drama en cuanto que es una separación de los seres queridos y una protesta del instinto de supervivencia.

Al ser la muerte una consecuencia del pecado está relacionada con algo originalmente negativo y la creencia en la victoria de Cristo sobre ella es algo basado en la Revelación sin la cual es imposible obtener una guía segura. El hecho de la muerte nos pone radicalmente en la realidad pues cualquier expectativa mundana que podamos tener queda relativizada y nos resulta inconsistente. Cuanto mayor sea el apego a este mundo mayor será el sufrimiento del desgarrón de la muerte.

También oímos la opinión de que una muerte precedida de una larga enfermedad es una “mala muerte” cuando desde el punto de vista espiritual ese periodo nos posibilita el prepararnos y por lo tanto hay que considerarlo como un tiempo de Gracia esperanzada. Habrá enfermedades terminales que en muchos casos habrán servido de ocasión para la salvación del alma.

Tenemos que mentalizarnos que la queja en la enfermedad por creer que somos una inutilidad es una equivocación. La actitud correcta cristiana ante la enfermedad es lo contrario: podemos hacer todo, ofreciendo a Dios con paz y resignación todo el padecimiento. Esto no quiere decir que deba rechazarse la ayuda del médico, más bien todo lo contrario: respetar al médico que recibe de Dios su ciencia. Puede estar implícita algún tipo de corrección en determinadas enfermedades.<sup>(3)</sup>

Si no se sufre con paciencia las tribulaciones no se mejorará el proceso de transformación. El Paraíso es el lugar de los pobres, humildes y afligidos. Las tribulaciones no son para la perdición obviamente sino para nuestro propio provecho. Aflicción, sufrimiento, dolor: todo es señal segura de que El

Padre Divino nos ama porque al contrario, el que no es tocado para la corrección es señal de que es dejado a su propia voluntad y será juzgado de acuerdo a sus actos. Suele ocurrir desgraciadamente que existen almas que en tiempo de tribulación tienen poca fe en Jesús y suelen acudir a medios satánicos como brujos y adivinos.

En las pruebas y tribulaciones adversas conocemos que somos viadores en peregrinación y que no conviene poner la esperanza en las cosas de este mundo o buscar apoyos en consolaciones humanas. Aunque a veces parezca inaguantable el dolor tenemos la certeza de que no seremos tentados más allá de nuestras fuerzas y nuestra oración siempre será atendida.<sup>(4)</sup> San Francisco de Asís nos cuenta en sus “Florecillas” cómo le fue revelado que la enfermedad que padecía era un don de Dios para merecer el gran tesoro de la vida eterna.<sup>(5)</sup>

El suicidio por otra parte es un caso de desesperanza al no encontrar un sentido a la existencia y la persona que decide quitarse la vida carece de fe activa basada en la Revelación y parece incapaz por tanto de dar ese significado trascendente a la vida que le dice que está llamado eternamente en el cielo con un cuerpo glorificado.

Ciertamente a veces asumimos teóricamente la resurrección pero fácilmente volvemos a echar raíces en lo cotidiano como si fuéramos a estar aquí en la tierra para siempre. Una actitud excesivamente apegada a esta vida tan fugaz nos lo pone todo más difícil para el tránsito final. En este sentido es importante tener la conciencia de que vamos de camino, de que peregrinamos en el tiempo de Gracia donde debemos purificarnos con el arrepentimiento.

Aunque ciertamente nadie puede juzgar el comportamiento humano la vida humana es un don que ha de ser amada santamente, es un medio que sirve para el fin que es la eternidad. En el cristianismo está la actitud de Santa Pelagia que no dudó en lanzarse al vacío desde el techo de su casa para conservar su virginidad.

Suele materializarse **la resurrección** en la idea de *la reencarnación* que liberaría a la persona de una utópica “rueda indefinida de nacimientos y muertes” lo cual es inadmisibles porque la vida es una y después de la muerte no se vuelve (a excepción de ciertos milagros narrados en el Evangelio).<sup>(6)</sup>

La creencia en la reencarnación apunta a otros errores fundamentales tal y como el considerar que un alma pueda salir del infierno, algo que desdice la Palabra revelada que expresa claramente que no es posible salvación para una persona condenada en el infierno, algo elegido por su entera voluntad. La persona elige el infierno oponiéndose totalmente al amor de Dios de una manera irrevocable pues en su impenitencia final, borra inexorablemente la señal divina en su espíritu humano. También destruye la maravillosa relación paterno-filial de la criatura con su Creador.

“Transmigrar” sería el hecho de que un alma pasase de un cuerpo a otro lo que para el cristianismo es inaceptable porque en la resurrección final ¿cuál sería el verdadero cuerpo asumido por el alma si ha poseído varios en sucesivas y supuestas reencarnaciones? El concepto “*reencarnación*” parece referirse más bien a algo inmanente, su significado va unido de un modo inseparable al contenido de la conciencia humana que materializa lo que es altamente espiritual.

En cambio “**resurrección**” implica la posibilidad y la necesidad de

trascender lo inmanente, para captar intuitivamente en la medida de lo posible lo “glorificado”, lo “glorioso”, lo “resucitado” referido a un plano más espiritual y menos material que “reencarnación”.

Es totalmente absurdo e inadmisibles que desoigamos la Revelación del Logos, la resurrección de Jesús es la verdad culminante de la fe cristiana con la esperanza de participación de su naturaleza divina.

El ser humano, la persona como tal tiene además de una responsabilidad personal y social, una responsabilidad ante Dios a través de su conciencia. Debemos rendir cuentas del uso que hacemos de nuestros talentos, recordando que las palabras de Jesús dirigidas al que había enterrado el talento son muy duras (Mateo, 25, 25-30).

Se suele percibir en ciertas cosmovisiones diferentes a la cristiana un intento de eludir esta responsabilidad ante Dios como Suprema Justicia. Se trata de ignorar que pueda existir algún Ser Superior que, al final de nuestra existencia, nos pida cuentas y nos señale la verdad sobre el bien y sobre el mal de los actos que hemos realizado. En las religiones monoteístas, en cambio, esta idea de un Dios que es justo Juez y que premia el bien y castiga el mal es algo esencial y básico.

El problema del infierno siempre ha sido un tema de desacuerdo entre las creencias religiosas pues es difícil comprender que un Dios que ha creado a sus criaturas con Amor pueda condenarlas eternamente en el Abismo. De hecho fue necesaria rechazar la teoría de la llamada “*apocatástasis final*” según la cual mantenía que el mundo sería regenerado y todas las criaturas se salvarían por el Amor Misericordioso de un Dios Creador. Esta teoría no tenía en cuenta que la persona que se condena rechaza voluntariamente a Jesús siendo una decisión personal. Dios no violenta la libertad y respeta tal

decisión.

No concebir un Dios de Justicia quiere decir admitir el mal y los crímenes en la historia de la humanidad y dejarlos impunes. La conciencia moral del ser humano reflexionando ante la posibilidad de la existencia de un lugar de castigo eterno, tal vez lo considere como una última tabla de salvación para decidirse a obrar rectamente.

Por otra parte está el tema del purgatorio. Algunos admiten el concepto de “fuego purificador” de la Sagrada Escritura como bíblico, en cambio no reconocen la doctrina católica referente al purgatorio como una llama purificadora necesaria para el alma antes de su encuentro con Dios.<sup>(7)</sup>

La muerte es siempre dolor por el sufrimiento físico, moral y espiritual como última expiación en el tiempo de la vida. Es el camino a semejanza de los últimos instantes de la pasión en la Cruz y la agonía en Getsemaní. (*Mateo 26, 39*); (*Lucas 23:34*)

Resumiendo, como actitud ideal del cristiano ante la muerte estaría en el ejemplo dado del Rey Mártir:

- *la resignación ante el hecho de morir (“Padre mío, si es posible que pase de mí esta copa ”)*
- *el perdonar a los que nos han ofendido (“Padre perdónales”)*
- *la confianza, el abandono de nuestro espíritu que torna a su fuente (“He aquí a tu hijo”)*
- *anonadamiento, desde nuestra nada somos crisálida que desea transformarse en mariposa, fango que quiere ser estrella (“Acuérdate de mí!”)*
- *mansamente y humildemente invocamos al Padre : (“Dios mío, ¿por qué me has abandonado?”)*

*- deseo de Dios, sólo apetecemos las cosas celestiales que como peregrinos exhaustos en exilio tenemos sed del Agua viva (“Tengo sed”).*

En estas palabras se invoca al Dador de la vida con resignación, humildad y oración sincera. Es la hora en que el mundo desaparece y percibimos la existencia de la otra vida. La palabra “Padre” despierta una confianza y abandono. Aunque sea una experiencia dolorosa es algo justo y santo al ser la voluntad divina. Cuando decimos **“pero no se haga mi voluntad sino la tuya”** esto nos absuelve de todos nuestros pecados de rebelión.

El martirio es el mayor testimonio que hay de una verdad. En el martirio la víctima no permite que la verdad sea relativizada a conveniencia partidista porque quieren hacer imperar lo que se considera “políticamente correcto” pero que va contra la Ley de Dios. Hay una identificación con Jesucristo y su destino martirial. Por gracia deseamos imitar la fortaleza en la fe.

Siempre ha sorprendido al mundo pagano la calma, la serenidad, la fortaleza de los mártires en la hora del martirio confundiéndola a veces con cierta indiferencia ante el supremo sacrificio. Esta incomprensión por parte de los verdugos es la expresión de la ignorancia del “amor de fusión” entre el alma y su Creador.

Los mártires son el supremo testimonio de la verdad de la fe cristiana. Un mártir es la persona que muere cruenta o incruentamente por amor a Jesucristo y en defensa de su fe cristiana. La muerte no es santa, no hay una “santa muerte” a la que igual que a un ídolo se obsequien regalos o sacrificios. Jesús viene a triunfar sobre la muerte. La muerte para el cristiano

es la vida.

La Palabra lo expresa así:

*¡Criaturas mías, la muerte es la vida! ¿Quién le teme a la vida?  
 ¡No vosotros que habéis tenido el dolor de la primera vida!  
 ¡Yo os espero allá. Yo estaré a vuestro lado en esa hora y, junto a Mí,  
 estarán también todos los que os aman y renacidos antes que vosotros  
 (y que) están ya aquí Conmigo entre Mis brazos, en Mi luz!  
 En el instante en que vuestra alma se libere, en ese primer instante y  
 después para siempre, tendréis la alegría más grande. ¿Y entonces  
 por qué teméis a la muerte?  
 La muerte es vuestra vida futura. En verdad os digo que Yo soy la  
 Vida.*

*(La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen I. Argentina,  
 editorial María Mensajera, 1 Edición 2002: 8 de Enero de 1974)*

Es sabido que la peregrinación de esta vida culmina en la identidad cristiana con las exequias que es la última Pascua del cristiano: la Unción de los enfermos. Aquí la gracia principal de este sacramento es la de consuelo, de paz y de ánimo para vencer las dificultades de la vejez y el sufrimiento del tránsito viene a ser una participación en la Pasión de Jesús. La Eucaristía como viático es semilla de vida eterna y poder de resurrección cerrando la peregrinación de la vida cristiana.<sup>(8)</sup>

El pensamiento de la muerte es justo decreto para todas las criaturas mortales y que resulta particularmente duro para la persona no creyente y

cargada de culpas sin arrepentimiento. Jesús hace su discurso sobre la muerte:

*“Se hace duelo ante los cadáveres. Se lloran. Pero el cadáver no llora. Uno tiembla por tenerse que morir, pero esa misma persona no se preocupa de vivir de forma que no haya de temblar en la hora de la muerte. ¿Y por qué no se llora y se hace duelo ante los cadáveres vivos, que son los cadáveres más verdaderos, aquellos que, como en un sepulcro, llevan en el cuerpo un alma muerta? ¿Y por qué los que lloran al pensar que su carne tiene que morir, no lloran por el cadáver que llevan dentro? ¡Cuántos cadáveres veo Yo, y que ríen y gastan bromas y no se lloran a sí mismos! ¡Cuántos padres, madres, esposos, hermanos, hijos, amigos, sacerdotes, maestros, veo que lloran sin sentido por un hijo, un cónyuge, un hermano, un padre, un amigo, un fiel, un discípulo, fallecidos en evidente amistad con Dios, después de una vida que ha sido una guirnalda de perfecciones; y que no lloran ante los cadáveres de las almas de un hijo, cónyuge, hermano, padre, amigo, fiel, discípulo, que está muerto por el vicio, por el pecado, y además muerto eternamente, perdido para siempre, si no se enmienda! ¿Por qué no tratar de resucitarlos? ¡Es amor, ¿sabéis?! Es el más grande amor. ¡Oh, lágrimas sin sentido por algo que era polvo y en polvo se ha convertido! ¡Idolatría del afecto! ¡Hipocresía del afecto! Llorad, sí, pero que sea por las almas muertas de vuestras personas más amadas. Tratad de llevarlos a la Vida. Y os hablo especialmente a vosotras, mujeres, que tanto podéis ante aquellos a quienes amáis.” (Valtorta, María. El Evangelio como me ha sido revelado. Volumen 6., págs. 153-4) Negritas del autor.*



## EPÍLOGO

### LA IDENTIDAD EN EL HUMANISMO CRISTIANO (INJERTO TRINITARIO)

*¡Adiós, gracias, adiós donaires,  
adiós regocijados amigos que yo  
me voy muriendo y deseando veros  
presto contentos en la otra vida.  
-Cervantes-*

La TESIS preliminar que el autor ha intentado argumentar en todo lo expuesto anteriormente podríamos concluirla sintetizando: la verdadera fe es la creencia en que todo ser humano desea encontrar su auténtica identidad, una identidad que va construyendo aquí como prólogo y contenido del libro de su vida y que desarrollará más plenamente en la otra, en el Reino de Dios. Construimos nuestro libro celestial con el dolor y el sufrimiento, los gozos y alegrías de nuestra conversión actual.

La identidad cristiana es como una árbol que ha sufrido el injerto de la voluntad divina (*identidad trinitaria injertada*) y la cosa más consoladora para un cristiano y los misterios de nuestra religión son: Jesús en el sacramento eucarístico y la resurrección de nuestros cuerpos a la gloria. Es por esto también una *identidad cristiana sacramental* que intenta expresar y desarrollar la comunión de fe en la Iglesia con un carácter personal pues cada uno desde diferentes estados y caminos han sido llamados por Jesús personalmente: “*Tú sígueme*” (*Juan 21, 22*). Hay una misión común en la que cada uno es personalmente portador de su propia

responsabilidad ante Dios.

El alma humana dotada de voluntad, inteligencia y memoria en su estado de inocencia estaba reflejando la Trinidad:

-En **la voluntad** humana perfecta el Padre comunicaba su Potencia y Santidad y no había diferenciación entre la voluntad humana y divina sino que era un todo común e imagen trinitaria.

-En **la inteligencia** humana perfecta el Hijo de Dios le comunicaba su Sabiduría y la ciencia para ser feliz en el bien. Era y es la suministradora de la Santísima Trinidad.

-En **la memoria** humana perfecta recuerda al concurrir el Espíritu Santo de los beneficios, estando en continua relación de Amor trinitario.

La identidad trinitaria al ser injertada en el alma dañada restaura y transforma la deformidad de las tres potencias haciendo morada en ella. Como expresión máxima de esta implantación están las palabras de Jesús que se revela como la vid verdadera.

No podemos confundir nuestra identidad humana (seres creados por Dios) con el ser de Dios. No todo lo que existe es Dios y el ser humano no tiene la misma índole ni la esencia de Dios aunque esté formado a su imagen y semejanza. Si el hombre fuese Dios (error de soberbia) no habría tenido necesidad de ser creado ni se explicaría el exilio en la tierra.

Esta fe del injerto divino en nuestra deteriorada semilla hace como de palanca para pontear el abismo entre lo humano y lo divino, reparando la sustracción que desde Adán hemos heredado. Equilibra y repara todo el mal que desde la raíz el árbol humano siente con los efectos malignos y los humores nocivos. El divino injerto hará correr sólo el humor vital de la

Voluntad Divina.

Cualquier acción que hagamos si no tiene conexión con la divina voluntad pone a Dios fuera de su propia creación lo que obviamente no puede agradar al Creador, incluso en el sufrimiento. Existe una encarnación del Verbo y otras tantas encarnaciones en el seno de las almas. No se puede decir cristiano si no se dispone a hacer la Voluntad de su Padre Celestial expresada en el Verbo.

Como se ha dicho no se trata de un quietismo sino de asumir todos los compromisos que nos ofrece la vida responsabilizándose por ellos, sean de orden moral, familiar, económico o social. Porque es asumiendo todos estos compromisos de nuestro estado entonces estamos haciendo la Voluntad divina.

La santidad del trabajo está implícito en las palabras del Génesis, si bien después de la desobediencia Yahveh maldijo el suelo y dijo al hombre que deberá sacar con fatiga el alimento todos los días “comiendo el pan con el sudor de tu rostro”. (*Genesis 3,19*)

Estas palabras no anulan la santidad del trabajo aunque ponga condiciones más severas. Cumplir un honesto trabajo implica amor al prójimo pues no robar en las transacciones, dar un salario justo, tratar humanamente y no explotar para un beneficio egoísta cumple la virtud de la caridad.

Hay trabajos que se hacen silenciosamente, humildemente, ignorado por los demás que incluso pueden pensar que no tienen ningún valor mientras se los realiza, pero solo Dios sabe la verdadera intención del corazón y darles su justa retribución.

Las abejas son modelos pues se esfuerzan con buena voluntad y tanto

las obreras como las reinas son necesarias para procrear pues cada una tiene su misión y aunque sea una carga pesada no se rebelan contra el fin para el que han sido creadas.

La actitud cristiana desea encontrar descanso en el mismo trabajo realizado ya que hay una alternancia entre el trabajo y el descanso. El trabajo nos llama al descanso y el descanso llama al trabajo, a nuevos trabajos. Descansamos en el trabajo que hemos realizado cumpliendo la voluntad divina como recreándonos en el acto de amor. Descanso no es ocio.

En el trabajo honesto de investigación no investigamos por curiosidad sino para conocer humildemente las leyes y misterios de la creación. Existe una ley de interdependencias de tal forma que el ACTO de cualquier ser produce vastísimas repercusiones tanto naturales como sobrenaturales. El ser humano profundiza con el saber los conocimientos acumulativos admirando las obras del Creador. Existe una biblioteca del conocimiento de Dios y lo escrito en la Palabra revelada o en las revelaciones particulares es sólo una parte para que tuviésemos algo con lo que identificarnos. En el cielo se continuará el aprendizaje y el trabajo.<sup>(9)</sup>

No podemos ponerle puertas a Dios queriendo que arregle nuestros asuntos a nuestro modo, Él sabe lo que es más conveniente para nuestro beneficio. Es por esto que le entregamos a Jesús el libro de nuestras preguntas inexplicables (*los porqué*) ya que todo lo nuestro está escrito en el libro de la vida en el que algún día encontraremos la explicación. Ahora queremos leer en el libro de la Cruz donde encontramos la vida de Jesús y la nuestra.

Misteriosamente en este libro de la cruz unos son atraídos por una

faceta de la vida de Jesús y otros por otra, el secreto es ir hasta donde la Voluntad divina permite comprender y profundizar en el pensamiento. Están también los que dejan el libro en las primeras páginas porque al encontrarse con la propia conciencia no se atreven a verse a sí mismos.

En los libros celestiales están escritas las obras hechas por todos y aunque la presciencia divina lo conoce todo, juzgará “conforme a sus obras” de lo que parece desprenderse de esta afirmación que no basta la fe para salvarse sino que son necesarias también obras buenas.

En este sentido se expresan algunas revelaciones privadas lo que denominan “los archivos del Cielo” en donde Dios guarda registro de todos los libros que reflejan nuestras vidas.

Según esto es urgente darse cuenta que el alma que vive en el querer divino se encuentra escribiendo el libro del Fiat Divino que es un libro que podemos decir que es eterno ya que la voluntad divina no puede tener fin. Reconozcamos el libro del Fiat divino en el fondo del propio alma para construir la vida perenne que nos encontraremos en el Cielo. Dado que nuestra palabra es acto y la encontraremos escritas en los libros celestiales, hagamos un acto de invocación en este sentido. **(10)**

Así pues la eterna felicidad es obtener el gozo del cielo en recompensa por las obras buenas realizadas en la tierra con la gracia de Dios. Aunque si bien todo es gracia y no puede hablarse de un derecho estricto de mérito por parte del hombre el hecho de que se hable de mérito es porque Dios ha dispuesto libremente asociar al ser humano a la obra de su gracia que intenta corresponder en la medida que le es permitido. Paradójicamente es tanto un derecho por gracia (por iniciativa divina) como una misteriosa cooperación del esfuerzo humano abandonándose en la divina voluntad. La

gracia por su parte es poseer la semejanza intelectual con Dios, signo inconfundible de nuestra filiación divina. Es el mayor don que Dios nos puede dar hasta tal punto que un alma que pierde la gracia puede decirse que lo ha perdido todo. La gracia nos deifica y sin ella seríamos simples criaturas animales.

*“La única muerte verdadera es morir en el alma: la única cosa que la criatura posee, ya que todo lo demás no es vuestro. Nosotros podemos disponer de vuestra vida, vosotros disponed de vuestras almas, a las que cuidaréis siempre, durante el tiempo que os ha sido dado.”* (**La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen I. Argentina, editorial María Mensajera, 1 Edición 2002: 26 de Junio de 1977**)

Jesús distingue implícitamente entre las recompensas humanas terrenas y las recompensas celestiales que proceden de Dios. Si amamos a quienes nos aman, nuestra recompensa es un incremento del amor humano. Si amamos a quienes nos odian, nuestra recompensa es un incremento del amor de Dios. Recompensa que es reconocida también en las obras de las mujeres que históricamente han sido silenciadas y cuyo simbolismo podemos intuir en el relato de la muerte de Jesús: *“Estaban allí mirando de lejos, muchas mujeres que habían seguido a Jesús desde Galilea y que lo habían ayudado.”* (*San Mateo 27, 55*)

En el antiguo Testamento encontramos alusiones al término “Recompensa”, por citar un ejemplo en II Macabeos pues los hombres de Judas fueron a recoger los cadáveres de los caídos para sepultarlos en los

sepulcros familiares. Este gesto expresaba la creencia de que está reservada a los que mueren piadosamente una magnífica recompensa y mandó ofrecer el sacrificio de expiación por los muertos.

Para obtener recompensa celestial hay que ir más allá de los valores humanos porque amar a los que nos aman no es difícil, en cambio amar al enemigo acerca a la perfección. Se valora más la humillación que el autoensalzarse. <sup>(11)</sup>

La recompensa viene de Dios que lee en el corazón cuando se reconoce que no basta con ser buenos según el mundo sino según las leyes del espíritu para obtener la gracia. Cuando hacemos un acto por un natural impulso a la humildad el Padre nos reserva una recompensa en el cielo que escribe en los libros eternos las promesas de Jesús y nuestras obras.

Es la recompensa que recibiremos por amar a Dios cuando nos olvidemos incluso de comer o de trabajar en demasiadas cosas que en realidad son inútiles tal y como le dijo Jesús a Marta pues a los ciudadanos del Reino les quedará sólo la caridad.

En algunas revelaciones privadas se habla de un “Departamento de recompensas celestiales” un lugar en el que se guardan registros de las recompensas que no recibimos en la tierra. En la medida que somos una bendición en la tierra para otros tendrá su efecto en el cielo. También se señala que el arrepentimiento borra de los libros celestiales todo tipo de pecados. En el arrepentimiento encontramos el perdón. <sup>(12)</sup>

Aunque cuando de veras nos entregamos al amor de Dios sin esperar por ello recompensa alguna es la mejor manera de recibir la gracias celestiales. Y esto porque quien Le invoca con afecto, con fe, sin distracción ni por mera costumbre siente e intuye que recibirá una especial recompensa

en el Cielo. Como nos dice la Palabra revelada *“De igual modo vosotros, cuando hayáis hecho todo lo que os fue mandado, decid: Somos siervos inútiles; hemos hecho lo que debíamos hacer.” (Lucas 17:10)*

Tendremos que rendir cuentas muy pronto y asumir nuestra responsabilidad. Al iluminarnos la visión implacable de nosotros mismos con la luz de la conciencia, esta luz alumbra la tiniebla de nuestro interior apoderándose de nosotros el miedo y la vergüenza: nos sentimos profundamente arrepentidos. Se nos promete un nombre nuevo.

En las moradas celestiales Dios recompensa lo que no podemos recibir en la tierra. Formaremos parte de la gran familia gozosa en donde la paz y tranquilidad serán increíbles. Aunque en el cielo todo es inimaginablemente maravilloso con una arquitectura indescriptible todo quedará eclipsado ante la mirada y la sonrisa de Jesús. Según revelaciones privadas solamente Jesús y María en el Paraíso poseen un cuerpo de carne y espíritu vivo hasta la resurrección al fin de los tiempos. El Padre crea las almas por amor al Hijo que a su vez por celo al Padre las juzga y recibe. **(13)**

San Juan tiene una visión en la que ve el cielo y en él un trono sobre el que está sentado el Señor rodeado de toda su corte. Los bienaventurados manifiestan su alegría ya que se anuncia las bodas del Cordero con su Iglesia. **(14)**

Cristo compró con su sangre el rescate. Jesucristo compara el reino del cielo a un banquete de bodas en el que todavía no ha llegado el momento pues ambas dimensiones, la natural y sobrenatural, abarcan dos etapas siendo la primera una preparación de la segunda. Los invitados son las personas que se sentarán con Cristo por toda la eternidad.



El cielo debe ser la tierra de los sueños que podemos realizar porque se habrá restablecido totalmente la comunión entre Dios y el ser humano. Nos encontraremos con personas que han hecho el bien según su conciencia recta y su buena voluntad sin excluir a los idólatras ni a los que profesan otra religión honestamente. (15)

La identidad cristiana se sustenta en un HUMANISMO CRISTIANO siempre renovado, es decir, la Humanidad de Cristo en acto continuo. Una Humanidad que nos comunicará sus virtudes cuanto más nos aniquilemos y conozcamos nuestra nada. Si miramos bien en el seno de María, en la Humanidad de Jesús recién concebida encontraremos en Ella a nuestras almas en las llamas del Amor de Cristo. Por medio de María como portadora la humanidad podía readquirir los derechos perdidos. La Creación, la Inmaculada y el Verbo Humanado hacen un vínculo inseparable lo humano y lo divino.

La identidad cristiana confía en la Humanidad de Jesús mediante la cual se sirve como escalera para subir a su Divinidad. Esta Humanidad divinizada no tenía límites y voluntariamente se restringía en Sí misma, y esto era la heroica humildad. Una humildad que asumió una Humanidad para semejarse en todo al ser humano. Su Humanidad unida a su Divinidad, de dos naturalezas hizo una sola, porque no sólo satisfizo a la divina Justicia sino que realizó la salvación humana.

Identidad en el humanismo cristiano quiere decir que tiene como espejo a la Humanidad de Cristo en la que el ser humano limpiará sus manchas adquiriendo la belleza y semejanza divina. Alimentarse de las obras de la Humanidad cristiana forman el alimento de Dios y el alma. El cristiano verdadero tratará de estar siempre frente a la Humanidad de Jesús

considerándola como un espejo en el cual se intenta reflejar y asemejarse. La Humanidad de Jesús sirve al ser humano como espejo para mirar en él su divinidad.

En esta analogía del espejo es como si Dios estuviese impaciente por salir de él, o sea, romper el espejo y estar en los corazones para encontrar la correspondencia del amor.

La Humanidad de Jesús tuvo por misión de su Divinidad la salvación de todas las almas y el oficio de Redentor, oficio que no habría estado completo si no hubiese encerrado en Sí mismo todas las gracias, los bienes, la luz que era necesario dar a cada alma. Lamentablemente no todas las almas se salvan (de acuerdo a su libre albedrío), pero por parte de Jesús como Redentor había las gracias necesarias y sobreabundantes para poder salvar a todas. El poder de la Palabra divina respeta la libertad humana de aceptar o no el injerto. <sup>(16)</sup>

Así pues, por una parte observando la Creación podemos pensar e intuir en el Creador y su origen. Las plantas y los animales son nuestro libro vivo pues quien sabe ver en la Naturaleza también sabe crear. El Génesis vive en la naturaleza y nos muestra los cimientos de nuestra fe. Y por otra parte la Humanidad de Jesús fue la que reordenó la armonía entre el Creador y la criatura. Todas las cosas creadas debían dar al Padre la gloria y la correspondencia completas y aunque las almas lo hagan imperfectamente quedan injertas en la Humanidad de Jesús. <sup>(17)</sup>

El gran prodigio de la encarnación, en cuanto se formó su Humanidad, es que hizo renacer a todas las criaturas en Sí mismo, así que en su Humanidad sentía todos sus actos distintos. Y habiéndonos hecho renacer a

todos en Sí mismo, nos llevó consigo todo el tiempo de su Vida. Nos engendró sobre la cruz, con sus dolores, entre espasmos atroces y en cuanto murió, renacimos todos a nueva vida, todos sellados y marcados con todo el obrar de su Humanidad; y no contento con habernos hecho renacer, nos dio a cada uno todo lo que había hecho para tenernos defendidos y a salvo, tal es la santidad que contiene el hombre: la santidad de la Humanidad de Jesús que es el Sacerdote eterno que intercede por nosotros.

*“Vosotros no podéis comprender el valor de vuestro dolor, que también fue el mío sobre la Cruz. ¡Lo veréis cuando hayáis vencido la muerte, al entrar en la Vida!*

*Y no llaméis muertos a aquellos que os han dejado. Ellos están verdaderamente vivos, han superado el tiempo y desde la belleza infinita os miran, os custodian, también a través de una estrella. Y el cielo es un completo tejido de estrellas. ¡Mis estrellas, mis Ángeles!”*

*(La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen II. Argentina, editorial María Mensajera, 1 Edición 2002: 13 de Enero de 1980)*

La analogía de la identidad cristiana al ser un injerto de la voluntad divina en la humana obviamente es una “fuerza que brota” del Cuerpo de Cristo siempre vivo y operante y son acciones del Espíritu Santo que actúan tanto con carácter personal como en el Cuerpo de su Iglesia. De esta manera el carácter sacramental de la identidad cristiana como signo eficaz de la gracia da frutos en quienes los reciben con las disposiciones requeridas

configurando una identidad sacramental que intenta restaurar la unidad de los cristianos. La *identidad cristiana sacramental* expresa y desarrolla la comunión de fe en la Iglesia y está ordenada a la santificación, a la edificación y en dar el culto y la adoración a Dios.<sup>(18)</sup>

El mundo de la Política, salvo raras ocasiones, tiene casi siempre como palanca la sed del poder. La lealtad raramente aparece y que con tal de conseguir tal poder no desdeña ni siquiera el delito practicando la hipocresía y la falsedad. Raramente el ser humano busca la solución en lo sobrenatural ni en la verdadera religión. En cambio buscan y curiosean en la ciencia, en nuevas filosofías, en descubrimientos científicos, viajes, placeres e incluso guerras. Esto sin contar los que dan un valor exclusivo a la razón y consideran que la Sagrada Escritura no necesita de un Magisterio de la Iglesia de Cristo porque puede ser interpretada personalmente por lo que no se duda en ir contra dicho Magisterio y los sacramentos instituidos. Sólo recordar que:

*—“Aún no se ha visto que enemigo alguno verdadero y grande de la Iglesia Católica, Apostólica Romana haya obtenido victoria. La historia de veinte siglos demuestra que todo aquél que alzó su mano prepotente sobre la Iglesia y desató su odio contra ella, se estrelló en sus sueños de gloria perversa, como demuestra también que las condenas eclesiásticas no son tan sólo sino realidad que Dios rubrica con su querer y que, a los heridos por ellas, otra cosa no les espera sino ruína en el tiempo y en la eternidad.” (Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, cap. 9, vv. 30-33, Libro electrónico.)*

Una vez dicho esto el Estado hará tareas limitadas en consonancia con la Ley de Dios. El orden en la administración del Estado refleja lo que se aconseja en la primera carta de San Pablo a los Corintios: “...*pero háganlo todo decentemente y con orden*”. (**1 Cor 14, 40**)

Puede servirse a Dios tomando parte en el gobierno con el objetivo de influenciar y trabajar en el Estado para el bien común, sabiendo la transitoriedad de esta vida y de que el objetivo principal es cumplir la voluntad de Dios en la medida de lo posible. En el profeta Isaías se hace resaltar que los acontecimientos nacionales e internacionales está gobernados por Dios: “*Porque el Señor es nuestro juez, nuestro legislador y nuestro rey, y él nos salvará*”. (**Isaías 33, 22**) lo que parece haber sugerido para algunos estados el paradigma de los tres poderes: legislativo, judicial y ejecutivo.

Hay un conocimiento de que los derechos humanos están basados en derechos inalienables porque están basados en dos suposiciones que son las que configurarían la identidad cristiana: 1) hemos sido creados por un Ser sobrenatural; y 2) este Ser proporciona la base de todos los derechos humanos. Sin embargo, puede suceder que el Estado abuse de su autoridad o legisle leyes contrarias a la de Dios, en cuyo caso debemos obedecer la ley trascendente de Dios antes que aquella del Estado.

Por su parte la misión de cualquier sacerdote, pastor o fiel no es una misión política o sindical sino “religiosa” dirigida al bien espiritual de las almas. En este sentido muchos pastores han desertado de su vocación porque al estar inmersos en las realidades humanas perdieron de vista su misión, les ha faltado el influjo de la Gracia que es fruto de una identidad viva de fe operante. Por ello hay sacerdotes que se predicán a sí mismos rebuscando el lenguaje o en la elegancia del decir.

La Palabra por sí misma es eficaz no la palabra del predicador pues nadie puede sustituir a Jesús:

*“Y cuando dije que todas las cosas pasarán pero no mi Palabra, quise decir también que todos, en cualquier época, la pueden comprender sin tener que interpretarla” (La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen II. Argentina, editorial María Mensajera, 2008, pág. 97)*

No construimos la identidad cristiana de una manera independiente generándola por nosotros mismos sino que recibimos el don del Espíritu Santo al renacer para comunicar y extender este don entre los demás a través de un nuevo proceso de socialización a través de la Iglesia universal en todas las culturas. Para ello el creyente necesita un principio de autoridad y el deber de obediencia voluntaria en la doctrina del depósito de **la fe** que custodia la Iglesia Católica.<sup>(19)</sup> **La fe** en Jesús además de ser algo dado es una conquista dependiendo de los talentos que hemos recibido:

*“A ti, que crees en Mí por pura fe, en verdad te digo: felices los pequeños... tú crees en Mí de manera total, confiando en Mí. Tu fe será premiada, así como la fe de cada uno, jaun cuando esta fuerza que es la fe, es un don! Por cierto que es un don y una conquista. Es un don para el que está en gracia, y la gracia también es una conquista”. (La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen II. Argentina, editorial María Mensajera, 2008, pág. 57)*

Para los culpables arrepentidos seamos plena caridad. Los culpables son enfermos que temen la mano del médico y su sentencia por lo que hay que

indicar que el miedo a Dios es infundado. La anticaridad es la actitud que teme sufrir humillación y no se atreve a arrastrar las vestiduras por la inmundicia para ayudar al prójimo e indicarle el nuevo camino. Es elocuente la actitud Jesús ante la mujer adúltera y la hipocresía de sus acusadores. Esta falta de caridad y de sinceridad ante acusadores que emiten juicios de los que no son presuntamente inocentes. Para condenar con justicia se requiere la ausencia de toda culpa y difícilmente tal comportamiento podía ser atribuido a los fariseos. <sup>(20)</sup>

Una verdadera amistad implica una unión de querer y el nudo indisoluble entre ambos será un participar de las penas y alegrías del otro. No es posible amarse y contradecirse porque el verdadero amor es vivir en la voluntad del otro incluso a costa de sacrificios. Una verdadera amistad se vuelve indivisible de tal forma que uno ha copiado en tal grado al otro que siente en sí mismo el ser de la persona amada. <sup>(21)</sup>

Actualmente hay una gran crisis de identidad porque la Iglesia de Jesucristo está dividida y será UNA bajo una Autoridad porque fue Jesús quien pidió a Pedro apacentar sus corderos y eligió a los apóstoles para cuidar sus ovejas. Edificó su Iglesia sobre la roca de Pedro y no hay necesidad de tergiversar su mandato según traman y conspiran contra Jesús. Quienes se oponen a Pedro se oponen a la Iglesia de Cristo, se oponen a su Ley y se oponen en suma a Dios. Cedamos y humillémonos para poder reconciliarnos y unirnos.

No se puede tocar el corazón únicamente con la elocuencia y la erudición sino cuando el Espíritu de Dios venga sobre nosotros y haga que las palabras que escribamos caiga como simiente viva en el alma de las personas.

Entonces podremos esperar algún fruto a su debido tiempo si mantenemos vivas dichas semillas del Verbo. En este sentido somos completamente dependientes de su Gracia por lo que tenemos que regocijarnos de tal dependencia pues si contáramos con la orgullosa pretensión de tener una reserva de poder individual en nuestro yo aparte de la gracia, estaríamos equivocando el camino.

La Iglesia de Jesús es la iglesia de un solo Pastor y un solo rebaño:

*“...está mi Palabra que todos tendrían que conocer porque Yo estoy en el corazón de todos, y no solamente de vosotros que sois mi Iglesia cristiana y católica, sino también en la otra Iglesia mía: el mundo y las almas de toda criatura, ¡el salvaje, el budista, el musulmán! Quien ama, quien cree en un DIOS que no conoce, pero siente en sí mismo, es mi Iglesia...” (La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen II. Argentina, editorial María Mensajera, 2008, pág. 219)*

En suma un amor abierto así al diálogo con otras creencias reconoce siempre una especie de camino común con todas las religiones en la convicción de que las “semillas del Verbo” están presentes en toda creencia que honestamente **tienda al bien** según una conciencia recta. Reflejan destellos de la Verdad que ilumina a todos los seres humanos de “buena voluntad” tal y como San Juan Pablo II nos recuerda los llamados semina Verbi (“semillas del Verbo”) presentes en todas las religiones y que no pocas veces reflejan un destello de aquella Verdad que ilumina a todo los hombres.<sup>(22)</sup>



**Tender al bien** es lo contrario de “pecar”. Hablamos de “pecado” cuando lo que se obra se hace con malicia de una manera consciente. Es elegir el mal queriendo obrar el mal a propósito. También existe el pecado cuando pudiendo obrar el bien no queremos realizarlo (pecado por omisión). Y sobre el bien, la Palabra lo dice:

*”-Todos hablan del bien pero no sé cómo definirlo, dímelo tu Rabboni Mío, ¿qué cosa es el Bien?”*

*-“Cefas, ¡el bien es todo lo que da gloria y honor a Dios! ¡Es todo lo que proviene del amor, es toda obra buena, es caridad, sacrificio, es todo lo que conduce a la verdadera Vida! ¡Todos saben distinguir el bien del mal, si bien de acuerdo con la manera de ser de cada uno! Y lo que contamina al hombre proviene de su interior, y el hombre reconoce en sí mismo el bien y el mal porque, además de mi ley divina, existe también un ley humana que todos conocen, aun aquellos que no me conocen: todos saben que no lícito robar, escandalizar, asesinar, traicionar... No escuchan entonces en su interior eso que los contamina para ser después libres para hacer lo que a ellos le place.” (La PALABRA continúa en el signo de los tiempos. Volumen II. Argentina, editorial María Mensajera, 2008, págs. 104-5)*

Como colofón reiterar el papel relevante de **María** como mediadora de todas las gracias en la construcción de la identidad cristiana en estos últimos tiempos en que el espíritu de rebeldía contra Dios ha seducido a la humanidad. **Es la señal de la victoria** que aparece en el cielo envuelta en el sol como en un vestido, con la luna bajo sus pies y una corona de doce

estrellas en la cabeza (*Apocalipsis 12, 1*). **Es la señal de la Madre que no eclipsa la gloria y el honor debidos a su Hijo.**<sup>(23)</sup> Fruto de su Corazón Inmaculado esperamos el Nuevo Pentecostés para obtener una nueva efusión del Espíritu Santo. Y en la hora de la muerte confiamos que nuestras almas consagradas a la Capitana Celeste sean presentadas ante Jesús por su propia Madre tal y como nos lo promete<sup>(24)</sup>.

## CITAS BÍBLICAS Y BIBLIOGRÁFICAS RELACIONADAS (\*)

### III. ESCATOLOGÍA Y SOTERIOLOGÍA EN LA IDENTIDAD CRISTIANA (DESTINO Y SALVACIÓN DEL SER HUMANO).

- (1) Jesús expuso claramente a petición de sus discípulos, el destino de cada uno según se elija el bien o el mal:

*“Y, respondiendo él, les dijo: El que siembra la buena semilla es el Hijo del Hombre; y el campo es el mundo; y la buena semilla son los hijos del reino, y la cizaña son los hijos del malo; y el enemigo que la sembró es el diablo; y la siega es el fin del mundo, y los segadores son los ángeles. De manera que, como se arranca la cizaña y se quema en el fuego, así será en el fin de este mundo. El Hijo del Hombre enviará a sus ángeles, y recogerán de su reino a todos los que causan tropiezo y a los que hacen iniquidad, y **los echarán al horno de fuego; allí será el llanto y el crujir de dientes.** Entonces los justos resplandecerán como el sol en el reino de su Padre. El que tiene oídos para oír, oiga.”* (**Mateo 13, 37:42**)

---

(\*) **Negritas del autor.**

- (2) *“Así sucederá al fin del mundo: saldrán los ángeles, separarán a los malos de entre los justos y los echarán en el horno de fuego; allí será el llanto y el rechinar de dientes.” (Mateo 13, 49:50)* Hay tres grandes categorías de personas según nos manifiesta San Pablo en su Epístola a los Romanos: *“La gran misericordia de Dios resplandece más luminosamente aún en las palabras de Pablo que, inspirado, proclama cómo únicamente perecerán aquellos que no reconocen ley alguna -natural, sobrenatural ni racional- mientras que aquellos que conocieron la Ley y no la practicaron, serán condenados por la misma Ley que salva; y más aún: que los gentiles que no tienen la Ley sino que, natural y racionalmente, hacen que la rectitud de corazón, por sumisión a las voces del Espíritu, desconocido pero presente, único maestro para su espíritu de buena voluntad, por obediencia, a aquellas inspiraciones que ellos siguen porque su virtud las ama sin saber que, de modo inconsciente, sirven a Dios -que estos gentiles, que con sus actos dan a entender que la Ley se halla escrita en su corazón virtuoso, serán justificados en el día del Juicio.” (Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, cap. 2, v.12. Traductor: Santiago Simón Orta. Libro electrónico.*

En la tercera categoría de los gentiles se nos dice que: *“Estos son muchos, en gran número. Será la muchedumbre inmensa...de toda nación, tribu, pueblo, lengua, sobre la cual, en el último día, por los infinitos méritos de Cristo inmolado hasta el derramamiento de la última gota de sangre y humor acuoso, aparecerá impreso, como prenda de salvación y premio, antes del último inapelable juicio, el sello del Dios Vivo” (Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, cap. 2, v.12. Traductor: Santiago Simón Orta. Libro electrónico.)*

- (3) No olvidemos que Dios castiga al que ama y lo prueba con adversidades a los que recibe como hijos: *“Pues a quien ama el Señor, le corrige; y azota a todos los hijos que acoge. Sufrís para corrección vuestra. Como a hijos os trata Dios, y ¿qué hijo*

*hay a quien su padre no corrige?” (Hebreos: 12, 6-7)*

En el Eclesiástico (Sirácida) encontramos consejos prácticos para muy diversas situaciones de la vida. En cuando a la enfermedad leemos: *“Ofrece a Dios sacrificios agradables y ofrendas generosas de acuerdo con tus recursos. Pero llama también al médico; no lo rechaces, pues también a él lo necesitas. Hay momentos en que el éxito depende de él, y él también se encomienda a Dios, para poder acertar en el diagnóstico y aplicar los remedios eficaces. Así que un hombre peca contra su Creador cuando se niega a que el médico lo trate.” (Eclesiástico 38, 11-15)*

- (4) No seremos tentados más allá de nuestras fuerzas: *“No habéis sufrido tentación superior a la medida humana. Y fiel es Dios que no permitirá seáis tentados sobre vuestras fuerzas. Antes bien, con la tentación os dará modo de poderla resistir con éxito”. (I Corintios 10:13)*

Nuestra oración siempre será atendida pues entre los trabajos de los ángeles como mensajeros del Altísimo está el de llevar nuestras plegarias: *“Los ángeles llevaban incensarios dorados que contenían oraciones. Los sostenían por los cuencos del incensario. Las oraciones son un cargamento precioso y son tratadas como tales. Ninguna oración se queda sin responder, incluso las oraciones erróneas. Las oraciones se llevan ante el rostro de Dios.” (Richard Sigmund. “Mi tiempo en el Cielo”. Capítulo 14. Cielo profético, pág. 94. Libro electrónico)*

- (5) *“Y la voz de Dios prosiguió: - ¡Regocíjate, Francisco, porque ese es el tesoro de la vida eterna que yo te tengo preparado, y cuya posesión te entrego ya desde ahora; y esta enfermedad y aflicción es prenda de ese tesoro bienaventurado ! (-Floreillas de San Francisco- Capítulo XIX.)*
- (6) No encontramos ninguna cita bíblica referente a la reencarnación puesto que se muere una sola vez y el alma no se reencarna en otro cuerpo diferente: *“Por*

*cuanto el destino de los hombres es morir una sola vez; y después de la muerte, el juicio.” (Hebreos 9,27)*

La identidad cristiana tiene una fe viva en la resurrección pues si no hay resurrección de los muertos tampoco Cristo ha resucitado: *”Pues si los muertos no resucitan, tampoco Cristo ha resucitado; y, **si Cristo no ha resucitado, vuestra fe no tiene sentido, seguís estando en vuestros pecados; de modo que incluso los que murieron en Cristo han perecido. Si hemos puesto nuestra esperanza en Cristo solo en esta vida, somos los más desgraciados de toda la humanidad.” (1Corintios 15, 16-19)***

Ya San Juan nos dice que seremos semejantes a Jesús cuando al resucitar transformemos esta condición limitada carnal: *”Mirad qué amor nos ha tenido el Padre para llamarnos hijos de Dios, pues ¡lo somos! El mundo no nos conoce porque no lo conoció a él. Queridos, ahora somos hijos de Dios y aún no se ha manifestado lo que seremos. Sabemos que, cuando él se manifieste, **seremos semejantes a él, porque lo veremos tal cual es. Todo el que tiene esta esperanza en él se purifica a sí mismo, como él es puro.**” (1 Juan 3, 2)*

Sobre la reencarnación las palabras del apóstol Pablo son muy elocuentes: *Hasta tal punto está encarnada y enraizada en vuestra mente la teoría de la reencarnación – y más que nunca hoy, tras veinte siglos de predicación evangélica – que parece que los antiguos paganos, a quienes yo partía el pan de la Fe, están vivos aún, o mejor, han vuelto a reencarnarse, según vuestra creencia y sus antiguas teorías sobre la resurrección y la segunda vida”* Y más adelante: *¡Necios! Los muertos no regresan. Ni siquiera con un nuevo cuerpo. Hay una sola resurrección: la final.” (Los Cuadernos 1943. Maria Valtorta. Italy, Centro Editoriale Valtortiano, 2000, pág. 46.)*

- (7) Encontramos la cita del Antiguo Testamento en la que Judas ofreció sacrificio por el pecado con miras a la resurrección y por expiación para que quedaran libres de pecado, lo que quiere decir que no son almas que pudieran estar en el cielo donde nada impuro puede entrar.

La reflexión de sentido común dice a la conciencia que si según la cita bíblica “*nada profano entrará en el cielo*” (Ap. 21, 27) cuesta imaginarse que todos podamos estar perfectamente santificados en el momento de la muerte. Si no existiese un lugar de purificación para entrar al Reino de Dios y sólo hubiese dos alternativas “cielo” e “infierno” aunque sabemos que para Dios no hay nada imposible, tendríamos que sufrir la expiación total aquí en esta vida. Solo Dios conoce el grado de culpabilidad y se nos pide razonar intuitivamente desde la fe que las palabras de la Biblia no sólo son instrucciones para esta vida cuando nos dice: “*Ponte enseguida a buenas con tu adversario mientras vas con él por el camino; no sea que tu adversario te entregue al juez y el juez al guardia, y te metan en la cárcel. Yo te aseguro: no saldrás de allí hasta que no hayas pagado el último céntimo.*” (Mateo 5, 25-26)

Jesús dice a un campesino que es mucho mejor sufrir expiando aquí que en el Purgatorio: “*¡Es tan difícil sufrir!... - dice el campesino, al cual se han unido los familiares (unos diez entre adultos y niños). -Sé que el hombre lo encuentra difícil. Y el Padre, sabiendo esto, al principio no había dado el dolor a sus hijos. El dolor vino por la culpa. Pero, ¿cuánto dura el dolor en la Tierra, en la vida de un hombre? Poco tiempo, siempre poco aunque durase toda la vida. Ahora bien, Yo digo: ¿No es mejor sufrir durante poco tiempo que siempre?, ¿no es mejor sufrir aquí que en el Purgatorio? Pensad que el tiempo allí se multiplica por mil. ¡Oh!, en verdad os digo que no se debería maldecir sino bendecir el sufrimiento, y llamarlo “gracia”, y llamarlo “piedad”. (El Evangelio como me ha sido revelado. Maria Valtorta. 83. Jesús sufre a causa de Judas... Libro electrónico )*

Por otra parte respecto al infierno:

“633 La Escritura llama **infiernos, sheol, o hades** (Cf. Flp 2, 10; Hch 2, 24; Ap 1, 18; Ef 4, 9) a la morada de los muertos donde bajó Cristo después de muerto, porque los que se encontraban allí estaban privados de la visión de Dios (Cf. Sal 6, 6; 88, 11-13). Tal era, en efecto, a la espera del Redentor, el estado de todos los muertos, malos o justos (Cf. Sal 89, 49; 1 S 28, 19; Ez 32, 17-32), lo

*que no quiere decir que su suerte sea idéntica como lo enseña Jesús en la parábola del pobre Lázaro recibido en el “seno de Abraham” (Cf. Lc 16, 22-26). “Son precisamente estas almas santas, que esperaban a su Libertador en el seno de Abraham, a las que Jesucristo liberó cuando descendió a los infiernos” (Catech. R. I, 6, 3). Jesús no bajó a los infiernos para liberar allí a los condenados (Cf. Cc. de Roma del año 745; DS 587) ni para destruir el infierno de la condenación (Cf. DS 1011; 1077) sino para liberar a los justos que le habían precedido (Cf. Cc de Toledo IV en el año 625; DS 485; Cf. también Mt 27, 52-53).” (Catecismo de la Iglesia Católica)*

*“Las puertas eran tan grandes como las puertas del cielo, pero estaban hechas de un material negro. Recuerdo escaleras, y había seres espantosos y grotescos tan altos como los ángeles que guardaban las puertas del cielo. Algunas figuras de demonios se acercan a lo espantosas que eran estas criaturas. Cuando vieron al Señor, gritaron horrorizados. También había llamas de castigo. Sentí la muerte y la desesperación allí. Oí a gente clamando. (...) Jesús me instó a contar a la gente lo que vi: Quiero que hables a otros de este lugar y les adviertas que, a menos que sean lavados con mi sangre, a menos que nazcan de nuevo, es aquí donde pasarán la eternidad “ (Richard Sigmund. “Mi tiempo en el Cielo”. Capítulo 19. El otro lugar. Libro electrónico, pág. 120).*

- (8) Jesús viene a derrotar la muerte no a ensalzarla: “Y cuando este ser corruptible se revista de incorruptibilidad y este ser mortal se revista de inmortalidad, entonces se cumplirá la palabra que está escrita: **La muerte ha sido devorada en la victoria.** ¿Dónde está, oh muerte, tu victoria? ¿Dónde está, oh muerte, tu aguijón? El aguijón de la muerte es el pecado; y la fuerza del pecado, la Ley. Pero ¡gracias sean dadas a Dios, que nos da la victoria por nuestro Señor Jesucristo! (I Corintios 15, 55-57)

El sacramento de la Unción de los enfermos instituido por Jesús :”...*expulsaban a*

*muchos demonios, y ungián con aceite a muchos enfermos y los curaban.” (Marcos 6, 13).*

*“1523 Una preparación para el último tránsito. Si el sacramento de la unción de los enfermos es concedido a todos los que sufren enfermedades y dolencias graves, lo es con mayor razón “a los que están a punto de salir de esta vida” (“in exitu viae constituti”; Cc. de Trento: DS 1698), de manera que se la llamado también “sacramentum exeuntium” (“sacramento de los que parten”, *Ibíd.*). La Unción de los enfermos acaba de conformarnos con la muerte y a la resurrección de Cristo, como el Bautismo había comenzado a hacerlo. Es la última de las sagradas unciones que jalonan toda la vida cristiana; la del Bautismo había sellado en nosotros la vida nueva; la de la Confirmación nos había fortalecido para el combate de esta vida. Esta última unción ofrece al término de nuestra vida terrena un sólido puente levadizo para entrar en la Casa del Padre defendiéndose en los últimos combates (Cf. *Ibíd.*: DS 1694).” (Catecismo de la Iglesia Católica)*

## EPÍLOGO

### LA IDENTIDAD EN EL HUMANISMO CRISTIANO (INJERTO TRINITARIO)

- (9) Con respecto a la santidad del trabajo como voluntad divina: *“Tomó, pues, Yahveh Dios al hombre y le dejó en al jardín de Edén, para que lo labrase y cuidase”.* (*Genesis 2, 15*)

*-“El trabajo humano procede directamente de personas creadas a imagen de Dios y llamadas a prolongar, unidas y para mutuo beneficio, la obra de la creación dominando la tierra (Cf. Gn 1, 28; GS 34; CA 31). El trabajo es, por tanto, un*



*deber: “Si alguno no quiere trabajar, que tampoco coma” (2 Ts 3, 10; Cf. 1 Ts 4, 11). El trabajo honra los dones del Creador y los talentos recibidos. Puede ser también redentor. Soportando el peso del trabajo (Cf. Gn 3, 14-19), en unión con Jesús, el carpintero de Nazaret y el crucificado del Calvario, el hombre colabora en cierta manera con el Hijo de Dios en su obra redentora. Se muestra como discípulo de Cristo llevando la Cruz cada día, en la actividad que está llamado a realizar (Cf. LE 27). El trabajo puede ser un medio de santificación y de animación de las realidades terrenas en el espíritu de Cristo.” (-Catecismo de la Iglesia Católica 2427-)*

*-“Los conocimientos acumulados hacen comprender cada vez más las obras del Creador y es causa de nuestra admiración: ¡Qué profundas son las riquezas de la sabiduría y del conocimiento de Dios!” (Romanos 11, 33)*

Según revelaciones privadas el aprendizaje continuará en el cielo:

*-“Otro edificio al que fui llevado contenía la parte escrita del conocimiento de Dios. Dios escribió parte de su conocimiento para que nosotros pudiéramos tener algo con lo que identificarnos. Había símbolos individuales, cada uno de ellos con la interpretación del símbolo escrita por Dios. Cuando uno está en la biblioteca del conocimiento de dios, la mente se estimula automáticamente”.*

(...)

*“Hay universidades magníficas en el cielo (quiero decir magníficas) y hay muchas. Nuestra educación no se termina cuando dejamos la tierra. Simplemente comenzó. (...) El aprendizaje no tiene final. Toda su mente se ilumina con la sabiduría y el conocimiento del cielo. Se usa el cien por ciento de su mente, y su capacidad va en aumento. En el cielo puede hacer todo lo que su corazón desea porque su deseo es de las cosas que son correctas.”. (Richard Sigmund. “Mi tiempo en el Cielo”. Capítulo 7. La biblioteca del conocimiento de Dios. Libro electrónico, pág. 59-60).*

## INVOCACIÓN-ORACIÓN

(10) *Sé que tu Plan, Padre, para cada instante es perfecto y sin defecto. Por ello estoy dispuesto a aceptar lo que cada momento presente me depare pues nada existe u ocurre fuera de lo ordenado y permitido por Ti en mi vida. Todas las cosas que me pasan giran alrededor de algo bueno en tu Plan. Ni el más mínimo acontecimiento ocurre fuera de tu Voluntad. Así pues, centro la atención en lo que está pasando en el momento actual, no en lo que ya pasó ni en lo que vendrá. Quiero aceptar todas las cosas como de Tu mano. Sé que nuestro sufrimiento tiene un objetivo pues Tú no puedes hacer algo que sea inútil. Los dolores son con un fin santo. Nuestras cortas o largas enfermedades son para disminuir nuestro expiar futuro y la de otros. Aunque esto nos hace trizas debemos pensar que para dar aceite que nutre, sana y consagra la aceituna debe ser triturada. Pero nuestras penas son las de Jesús que sufre con nosotros, por eso, animados nos abandonamos en Él en el que encontramos sin duda la fuerza necesaria para aceptarlas. Jesús y María conocen bien el sufrimiento y les duele tener que sazonarnos así. Reconozcamos que hasta Dios no encontró otro camino para salvar al mundo sino el dolor. Así pues las alegrías y tristezas, las dichas y sufrimientos de este instante te las ofrezco por la salvación de las almas viadoras y la purificación total de las almas del purgatorio. **Que siempre estemos en estado de gracia santificante.** Esto lo escribo desde el corazón correspondiendo a Tu Amor.*

(11) *“Habéis oído que se dijo: Amarás a tu prójimo y odiarás a tu enemigo. Pues yo os digo: **Amad a vuestros enemigos y rogad por los que os persigan,** para que seáis hijos de vuestro Padre celestial, que hace salir su sol sobre malos y buenos, y llover sobre justos e injustos. Porque si amáis a los que os aman, ¿qué recompensa vais a tener? ¿No hacen eso mismo también los publicanos? Y si no saludáis más que a vuestros hermanos, ¿qué hacéis de particular? ¿No hacen eso mismo también los gentiles? Vosotros, pues, sed perfectos como es perfecto vuestro Padre celestial”.*

**(Mateo 5, 43-48)**

En el salterio y en Apocalipsis se hace referencia a la recompensa divina: “*Más de una vez he escuchado esto que Dios ha dicho: que el poder y el amor le pertenecen, y que él recompensa a cada uno conforme a lo que haya hecho.*” (Salmo 62, 63)

“*Las naciones se habían encolerizado; pero ha llegado tu cólera y el tiempo de que los muertos sean juzgados, el tiempo de dar la recompensa a tus siervos los profetas, a los santos y a los que temen tu nombre, pequeños y grandes, y de destruir a los que destruyen la tierra.*” (Apocalipsis 11, 18) Sobre el valor de la humillación: “*Porque todo el que se ensalce, será humillado; y el que se humille, será ensalzado.*” (Lucas 1, 11)-“*Pero muchos primeros serán últimos y muchos últimos primeros.*” (Mateo 19, 30)

- (12) En algunas revelaciones privadas encontramos también la importancia del arrepentimiento en la conversión: “*Recibí el entendimiento de que cuando nos arrepentimos, todo lo que habíamos hecho que fuera malo o pecaminoso en naturaleza y que estuviera grabado en los libros es borrado para la eternidad. Nadie puede encontrar el registro, ni siquiera Dios.* (Richard Sigmund. “*Mi tiempo en el Cielo*” Libro electrónico, pág. 55).

En la doctrina católica todo tipo de calamidades y de enfermedades tienen un claro mensaje divino de invitación al arrepentimiento:

“*¡Cuántos signos os manda el Señor para invitaros al arrepentimiento y a la enmienda: Enfermedades, desgracias, males incurables que se propagan, guerras que se extienden, amenazas de males inminentes. En estos tiempos, para no desesperar, para caminar por la senda de una fe inquebrantable y segura, se hace urgente vivir con la mirada puesta en el Paraíso, donde, con Jesús, vuestra Madre Celeste os ama y os sigue también con su cuerpo glorioso.*”(…) (A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen. Libro electrónico.)

- (13) Parece ser que en el cielo se tiene conocimiento cuando un alma va a pasar “a través del velo” cuando se ha separado del cuerpo para tener una cita con Dios. Cada alma tiene un camino especial para cada cual: *“Todos los que atravesaban el velo tenían un camino único para ellos, y yo mismo tenía un camino, el camino era para mí”*. (Richard Sigmund. *Mi tiempo en el cielo. Libro electrónico, pág. 23*) *“Todo era muy hermoso, pero todo se atenuaba al mirar a Jesús. Sólo un destello suyo, y todo lo demás palidecía en comparación. Cuando le vi y miré su maravilloso rostro, incluso la bella arquitectura del cielo se me olvidó. Él es la imagen expresa del Padre (véase Hebreos 1:3, RVR) y todo el cielo gira en torno al Señor y su Gran misericordia.”* (Richard Sigmund. *Mi tiempo en el cielo. Libro electrónico, pág. 44*)

*“Únicamente Jesús y María poseen un cuerpo de carne y espíritu vivo, palpitante, perfecto, sensible al tacto y al contacto, son “cuerpos” realmente aunque son cuerpos divinos. El Padre Eterno, el Espíritu Santo y mi ángel son cuerpos modelados en la luz, de modo que esta humilde sierva de Dios pueda percibirlos.”* (Los Cuadernos 1944. Maria Valtorta. Italy, Centro Editoriale Valtortiano, 2000, pág. 39.)

*“Veo que, por amor al Hijo – a quien siempre quiere dar el mayor número de adictos – el Padre crea las almas. ¡Oh, qué hermoso es! (...)*

*Y por celo hacia su Padre, el Hijo recibe y juzga, sin pausa, a los que vuelven al Origen para ser juzgados, una vez que ha cesado en ellos la vida. Yo no los veo pero, por el cambio de expresión de Jesús, comprendo si son juzgados con júbilo, con misericordia o inexorablemente. ¡Cómo resplandece su sonrisa cuando se presenta ante Él un santo! ¡Qué luz de desconsolada misericordia cuando debe separarse de alguien que, antes de entrar en el Reino, debe purificarse! ¡Qué destello de dolorosa, de ofendida pesadumbre, cuando debe repudiar por la eternidad a un rebelde!* (Los Cuadernos 1944. Maria Valtorta. Italy, Centro Editoriale Valtortiano, 2000, pág. 328.)

- (14) En el libro del Apocalipsis se refiere a las “bodas del Cordero”

*“Alegrémonos y regocijémonos y démosle gloria, porque han llegado las bodas del Cordero, y su Esposa se ha engalanado y se le ha concedido vestirse de lino deslumbrante de blancura - el lino son las buenas acciones de los santos». Luego me dice: «Escribe: **Dichosos los invitados al banquete de bodas del Cordero.**» Me dijo además: «Estas son palabras verdaderas de Dios.” (Apocalipsis 19; 7-9)*

También en revelaciones privadas:

*“LA CENA DE LAS BODAS DEL CORDERO. Luego, Jesús se volvió a mí y les dijo a los ángeles: “Lleven a Richard a la fiesta de bodas, y déjenle verlo. Está casi lista”. Estaba ahí antes de poder ni siquiera pensarlo.*

*Vi un edificio que era muy alto. Tenía soportes y columnas con arcos separados unos quince metros. Las mesas donde la fiesta de bodas se iba a celebrar estaban hechas de oro con joyas incrustadas. Estas mesas estaban alineadas con sillas que parecían tronos de reyes.*

*Así es como me parecieron, y no tengo otras palabras para explicar la belleza con la que estaban hechas. El pabellón tenía unos treinta kilómetros de largo, según mi mejor estimación. Había tres filas de mesas en un atroz semicírculo, con un trono en el fondo.*

*Cada silla tenía un nombre grabado en el interior del respaldo. Pregunté cuándo habían sido grabados, y el Señor dijo: “Cuando sus nombres fueron escritos en el libro de la vida del Cordero”. (Richard Sigmund. **Mi tiempo en el cielo. Libro electrónico, pág. 52**)*

- (15) *“Os digo que Dios juzgará las acciones de los hombres, y el Cristo, Juez de todas las gentes, premiará a aquellos en quienes el deseo del alma tuvo voz de íntima ley **para llegar al fin último del hombre, que es unirse de nuevo con su Creador**, con el Dios desconocido para los paganos pero sentido como verdadero y santo más allá del escenario pintado de los falsos Olimpos. Es más, tened mucho cuidado de no ser vosotros escándalo para los gentiles. Ya demasiadas veces ha sido*

*mancillado el nombre de Dios entre los gentiles por las obras de los hijos del pueblo de Dios. No intentéis creeros tesoreros absolutos de mis dones y méritos. Yo he muerto por judíos y gentiles. Mi Reino será de todas las gentes.*

(...)

**“No exijáis mucho a los gentiles. Basta con que tengan la fe y con que obedezcan a mi Palabra. Una nueva circuncisión toma el lugar de la antigua. De ahora en adelante, la circuncisión del hombre es la del corazón; la del espíritu, mejor aún que la del corazón; porque la sangre de los circuncisos, que significa purificación de aquella concupiscencia que excluyó a Adán de la filiación divina, ha quedado sustituida por mi Sangre purísima, la cual es válida en el circunciso y en el incircunciso en cuanto al cuerpo, con tal de que tenga mi Bautismo y de que renuncie a Satanás, al mundo y a la carne por amor a Mí. No despreciéis a los incircuncisos. Dios no despreció a Abraham, a quien, por su justicia y antes de que la circuncisión mordiera su carne, eligió como jefe de su Pueblo. Si Dios estableció contacto con Abraham (Génesis 12, 1-3.7) para transmitirle sus preceptos cuando era incircunciso vosotros podréis establecer contacto con los incircuncisos para instruirlos en la Ley del Señor. Considerad cuántos pecados han cometido y a qué pecado han llegado los circuncisos. No seáis, pues, intransigentes con los gentiles.”**  
**(Valtorta, Maria. El Evangelio como me ha sido revelado. Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2002. 635)**

(16) Como dice expresamente Isaías sobre el poder de la Palabra:

*“Así como la lluvia y la nieve bajan del cielo, y no vuelven allá, sino que empañan la tierra, la fecundan y la hacen germinar, y producen la semilla para sembrar y el pan para comer, así también la palabra que sale de mis labios no vuelve a mí sin producir efecto, sino que hace lo que yo quiero y cumple la orden que le doy.” (Isaías 55, 10:11)*

*“Ciertamente es viva la Palabra de Dios y eficaz, y más cortante que espada alguna de dos filos. Penetra hasta las fronteras entre el alma y el espíritu, hasta las*

*juntas y médulas, y escruta los sentimientos y pensamientos del corazón. No hay para ella criatura invisible: todo está desnudo y patente a los ojos de Aquel a quien hemos de dar cuenta.” (Hebreos 4, 12-13)*

(17) Diálogo entre Gamaliel y Jesús:

G - “*Quieres mucho a las plantas y a los animales, ¿no?*”

J - *Sí, mucho; es mi libro vivo. El hombre tiene siempre ante sus ojos los cimientos de la fe. El Génesis vive en la naturaleza. Y quien sabe ver sabe también creer. ¿Puede, acaso, esta flor de tan delicado perfume y delicada materia de sus colgantes corolas, y tan en con-traste con este espinado enebro y con aquella aulaga de punzantes hojas, haberse hecho sola? Y, mira allí, ¿puede, acaso, haberse hecho así, solo, aquel petirrojo, con esa pincelada de sangre seca en su blando cuello? ¿Y aquellas dos tórtolas?: ¿cómo van a haber podido pintarse ese collar de ónix sobre el velo de las plumas grises? ¿Y allí, esas dos mariposas?: una, negra con su dibujo de grandes ojos de oro y rubí; blanca con rayas azules la otra: ¿dónde habrán encontrado las gemas y cintas para sus alas? ¿Y este riachuelo?: es agua, sí, pero ¿de dónde proviene?, ¿cuál es la fuente primera del agua elemento? ¡Ah, mirar quiere decir creer, si se sabe ver!” (Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. 160. Encuentro con Gamaliel en Neftalí a Yiscala.)*

- 468 Después del concilio de Calcedonia, algunos concibieron la naturaleza humana de Cristo como una especie de sujeto personal. Contra éstos, el quinto concilio ecuménico, en Constantinopla el año 553 confesó a propósito de Cristo: “No hay más que una sola hipóstasis [o persona], que es nuestro Señor Jesucristo, uno de la Trinidad” (DS 424). Por tanto, todo en la humanidad de Jesucristo debe ser atribuido a su persona divina como a su propio sujeto (Cf. ya Cc. Éfeso: DS 255), no solamente los milagros sino también los sufrimientos (Cf. DS 424) y la misma muerte: “El que ha sido crucificado en la carne, nuestro Señor Jesucristo, es verdadero Dios, Señor de la gloria y uno de la santísima Trinidad” (DS 432)

469 *La Iglesia confiesa así que Jesús es inseparablemente verdadero Dios y verdadero hombre.(...) (Catecismo de la Iglesia Católica. A.E.C., 01992., pág. 110).*

-“206 Al revelar su nombre misterioso de YHWH, “Yo soy el que es” o “Yo soy el que soy” o también **“Yo soy el que Yo soy”**, Dios dice quién es y con qué nombre se le debe llamar. Este Nombre Divino es misterioso como Dios es Misterio. Es a la vez un Nombre revelado y como la resistencia a tomar un nombre propio, y por esto mismo expresa mejor a Dios como lo que él es, infinitamente por encima de todo lo que podemos comprender o decir: es el “Dios escondido” (Is 45,15), su nombre es inefable (Cf. Jc 13,18), y es el Dios que se acerca a los hombres”. (Catecismo de la Iglesia Católica. A.E.C., pág. 55).

- (18) “2096 *La adoración es el primer acto de la virtud de la religión. Adorar a Dios es reconocerle como Dios, como Creador y Salvador, Señor y Dueño de todo lo que existe, como Amor infinito y misericordioso. “Adorarás al Señor tu Dios y sólo a él darás culto” (Lc 4, 8), dice Jesús citando el Deuteronomio (6, 13).*

2097 *Adorar a Dios es reconocer, con respeto y sumisión absolutos, la “nada de la criatura”, que sólo existe por Dios. Adorar a Dios es alabarlo, exaltarle y humillarse a sí mismo, como hace María en el Magnificat, confesando con gratitud que Él ha hecho grandes cosas y que su nombre es santo (Cf. Lc 1, 46-49). La adoración del Dios único libera al hombre del repliegue sobre sí mismo, de la esclavitud del pecado y de la idolatría del mundo. (Catecismo de la Iglesia Católica)*

- (19) “*Un día seréis sacerdotes de mi Iglesia. Seréis, por tanto, los médicos y maestros de los espíritus. Recordad estas palabras mías. No seréis sacerdotes, o sea, ministros de Cristo, maestros y médicos de almas, por el nombre que llevéis, ni por el indumento, ni por las funciones que ejerzáis, sino que lo seréis por el amor que poseáis. El amor os dará todo lo que se necesita para serlo; y las almas, todas distintas entre sí, alcanzarán una única semejanza: la del Padre, si sabéis*



*trabajarlas con el amor.*” (Valtorta, *Maria. El Evangelio como me ha sido revelado. 406. Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2002.*)

*“Prometí a Pedro que la Iglesia, que tendrá como cúspide y como base mi Piedra, no será desarticulada por el Infierno, con sus repetidos y cada vez más feroces asaltos; mas ahora te digo que aquello que será todavía Yo mismo, y que tú dejarás como luz para quien busca la Luz, no será destruido, a pesar de que el Infierno trate y tratará- de cancelarlo usando todos los modos. Te digo más: incluso aquellos que crean en mí imperfectamente, porque aun recibíendome a mí no recibirán a mi Pedro, (Alude Jesús a los futuros protestantes) acudirán siempre a tu faro, como barquichuelos sin piloto y sin brújula que se dirigen hacia una luz en medio de su tempestad, porque luz quiere decir todavía salvación.”* (Valtorta, *Maria. Op. cit. 508*)

*“751 La palabra “Iglesia” [“ekklèsia”, del griego “ek-kalein” - “llamar fuera”] significa “convocación”. Designa asambleas del pueblo (Cf. Hch 19, 39), en general de carácter religioso. Es el término frecuentemente utilizado en el texto griego del Antiguo Testamento para designar la asamblea del pueblo elegido en la presencia de Dios, sobre todo cuando se trata de la asamblea del Sinaí, en donde Israel recibió la Ley y fue constituido por Dios como su pueblo santo (Cf. Ex 19). Dándose a sí misma el nombre de “Iglesia”, la primera comunidad de los que creían en Cristo se reconoce heredera de aquella asamblea. En ella, Dios “convoca” a su Pueblo desde todos los confines de la tierra. El término “Kiriaké”, del que se deriva las palabras “church” en inglés, y “Kirche” en alemán, significa “la que pertenece al Señor”.*

*752 En el lenguaje cristiano, la palabra “Iglesia” designa no sólo la asamblea litúrgica (Cf. 1 Co 11, 18; 14, 19. 28. 34. 35), sino también la comunidad local (Cf. 1 Co 1, 2; 16, 1) o toda la comunidad universal de los creyentes (Cf. 1 Co 15, 9; Ga 1, 13; Flp 3, 6). Estas tres significaciones son inseparables de hecho. La “Iglesia” es el pueblo que Dios reúne en el mundo entero. La Iglesia de Dios existe*

*en las comunidades locales y se realiza como asamblea litúrgica, sobre todo eucarística. La Iglesia vive de la Palabra y del Cuerpo de Cristo y de esta manera viene a ser ella misma Cuerpo de Cristo.” (-Catecismo de la Iglesia Católica-)*

(20) *“Jesús escribe. Escribe, y borra, con el pie calzado con sandalia, lo escrito; y escribe más allá, volviéndose despacio en torno a sí buscando espacio nuevo. Parece un niño jugando. Pero lo que escribe no son palabras de juego; ha ido escribiendo: «Usurero», «Falso», «Hijo irreverente», «Fornicador», «Asesino», «Profanador de la Ley», «Ladrón», «Lujurioso», «Usurpador», «Marido y padre indigno», «Blasfemo», «Rebelde contra Dios», «Adúltero». Escrito una y otra vez, mientras nuevos acusadores siguen hablando.*

*-¡Pero, en fin, Maestro! Tu juicio. Esta mujer debe ser juzgada. No puede con su peso contaminar la Tierra. Su aliento es veneno que turba los corazones.*

*Jesús se alza. ¡Misericordia! ¡Qué rostro! Es todo un fulgir de relámpagos lanzados contra los acusadores. Tiene tan erguida la cabeza, que parece aún más alto. Tan severo y solemne se manifiesta, que parece un rey en su trono. El manto se le ha descolgado de un hombro y forma una ligera cola tras Él; pero Él no se preocupa de ello. Serio el rostro, sin la más lejana huella de sonrisa en la boca y en los ojos, planta éstos en la cara de la gente, que retrocede como frente a dos puñales puntiagudos. Mira fijamente a cada uno. Con una intensidad de escudriñamiento que produce miedo. Los mirados tratan de retroceder entre la gente y de esconderse entre ella. El círculo, así, se ensancha y se disgrega como minado por una fuerza oculta.*

*Hasta que habla: -**Quien de vosotros esté sin pecado que tire contra la mujer la primera piedra.** Y la voz es un trueno, acompañado de un aún más vivo centelleo de la mirada. Jesús ha recogido los brazos sobre el pecho, y está así, erguido como un juez, esperando. Su mirada no da paz; hurga, penetra, acusa. Primero uno, luego dos, luego cinco, luego en grupos, los presentes se alejan cabizcaídos. No sólo los escribas y los fariseos, sino también los que estaban antes en torno a Jesús y otros que se habían acercado para oír el juicio y la condena y*

*que, tanto aquéllos como éstos, se habían unido para injuriar a la culpable y pedir la lapidación. Se queda sólo con Pedro y Juan. No veo a los otros apóstoles. Jesús se ha vuelto a poner a escribir, mientras se produce la fuga de los acusadores; ahora escribe: «Fariseos», «Víboras», «Sepulcros de podredumbre», «Embusteros», «Traidores», «Enemigos de Dios», «Insultadores de su Verbo»... (Valtorta, **Maria. El Evangelio como me ha sido revelado. 494. Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2002., pág. 422**)*

- (21) *"Un amigo fiel es una protección segura; el que lo encuentra ha encontrado un tesoro. Un amigo fiel no tiene precio; su valor no se mide con dinero. Un amigo fiel protege como un talismán; el que honra a Dios lo encontrará. El amigo es igual a uno mismo, y sus acciones son iguales a su fama."*(**Eclesiástico 6, 14-17**)

Sobre esto están las palabras maravillosas del Apóstol: *"Tener amor es saber soportar, es ser bondadoso; es no tener envidia, ni ser presumido, ni orgulloso, ni grosero, ni egoísta; es no enojarse ni guardar rencor, es no alegrarse de las injusticias, sino de la verdad. Tener amor es sufrirlo todo, creerlo todo, esperarlo todo, soportarlo todo. El amor jamás dejará de existir". (1 Corintios 13, 4-8)*

- (22) Cf. **"Cruzando el umbral de la esperanza" Juan Pablo II. Barcelona, Plaza & Janés Editores, 1994, pág. 96.**

*"843 La Iglesia reconoce en las otras religiones la búsqueda "todavía en sombras y bajo imágenes", del Dios desconocido pero próximo ya que es Él quien da a todos vida, el aliento y todas las cosas y quiere que todos los hombres se salven. Así, la Iglesia aprecia todo lo bueno y verdadero, que puede encontrarse en las diversas religiones, "como una preparación al Evangelio y como un don de aquel que ilumina a todos los hombres, para que al fin tengan la vida" (LG 16; Cf. NA 2; EN 53). (Catecismo de la Iglesia Católica)*

Así pues, aunque existe una autoridad moral en cuanto al depósito de la fe en la Iglesia de Cristo que es universal (católica) Dios dará gloria a todos los que hacen lo bueno sean o no de la Iglesia católica porque no hace diferencia entre unos y otros sean de la denominación que sean. Por eso leemos que: “ *En efecto, cuando los gentiles, que no tienen ley, **cumplen naturalmente las prescripciones de la ley**, sin tener ley, para sí mismos son ley; como quienes muestran tener la realidad de esa ley escrita en su corazón, atestiguándolo su conciencia, y los juicios contrapuestos de condenación o alabanza en el día en que Dios juzgará las acciones secretas de los hombres, según mi Evangelio, por Cristo Jesús.*” (**Romanos, 2, 14-16**)

La universalidad del cristianismo ya fue prevista por Dios cuando anunció a Abraham la buena nueva para todas las naciones: “*La Escritura, previendo que Dios justificaría a los gentiles por la fe, anunció con antelación a Abraham esta buena nueva: En ti serán bendecidas todas las naciones. Así pues, los que viven de la fe son bendecidos con Abraham el creyente.*” (**Gálatas 3, 8**). Pablo, como apóstol de los gentiles, le fue concedida esta gracia para que conociesen a Dios y fuesen justificados pues: “*... los gentiles sois coherederos, miembros del mismo Cuerpo y partícipes de la misma Promesa en Cristo Jesús por medio del Evangelio,*”(**Efesios 3, 6**)

(23) “*¡Dicen que Yo —la Madre— eclipso la gloria y el honor debidos solamente a mi Hijo! ¡Pobres hijos míos, cuán insensatos son, cuán ciegos están! ¡Cómo el demonio ha sabido atraparlos! A tan gran ceguera han llegado por no habernos escuchado ni a Jesús ni a Mí. ¡Se han dejado conducir sólo por sí mismos, por su inteligencia, por su soberbia, y así se han prestado al juego de Satanás, que era el de lograr —finalmente— oscurecerme en la Iglesia y borrarne de las almas!*” (**A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen. Impreso en Brasil, Centro Internazionale. Movimento Sacerdotal Mariano, 2000. [www.msm-mmp.org](http://www.msm-mmp.org).23 edición española, p. 86**)

(24) ***“En la hora de vuestra muerte, estoy cerca de vosotros, con el esplendor de mi Cuerpo glorioso, acojo vuestras almas entre mis brazos maternos y las llevo ante mi Hijo Jesús, para su juicio particular. ¡Pensad qué gozoso debe ser el encuentro con Jesús para aquellas almas que son presentadas a Él por su propia Madre! Porque yo las recubro con mi belleza, les doy el perfume de mi santidad, el candor de mi pureza, la vestidura blanca de mi caridad, y donde ha quedado alguna mancha, Yo paso mi mano materna, para borrarla y daros aquel esplendor que os permite entrar en la eterna bienaventuranza del Paraíso. Bienaventurados aquellos que mueren junto a vuestra Madre Celestial. Sí, bienaventurados, porque mueren en el Señor, encontrarán reposo de sus fatigas y el bien que han hecho les acompaña.”*** (*A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen. Op. cit. pág. 971*)

- El autor agradece a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo en el que se han utilizado ideas publicadas en anteriores escritos así como videos, entre otros los de [www.ESCUELADEBIBLIA.COM](http://www.ESCUELADEBIBLIA.COM); los del padre Ignacio Larrañaga, los de EWTN y los del CATECISMO de Mons. José Ignacio Munilla.



¿...NO ESTOY YO AQUÍ QUE SOY TU MADRE...?  
-Basílica de Nuestra Señora de Guadalupe (México)-

